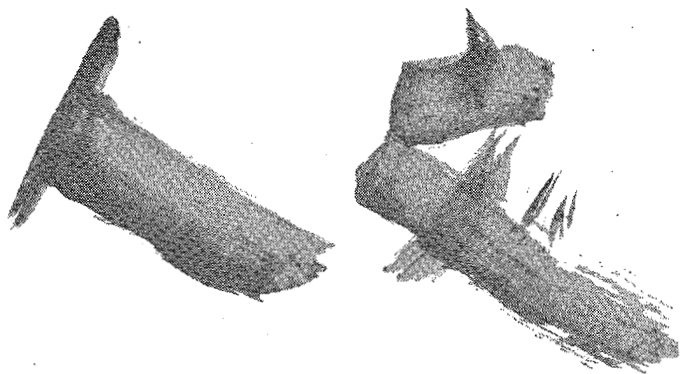
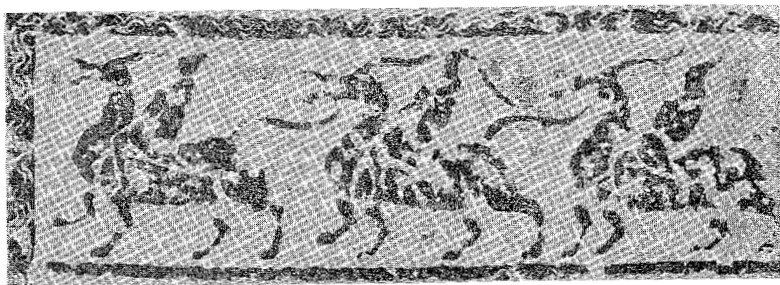


Title	人文 第7号
Author(s)	
Citation	人文 (1973), 7: 1-45
Issue Date	1973
URL	http://hdl.handle.net/2433/57133
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

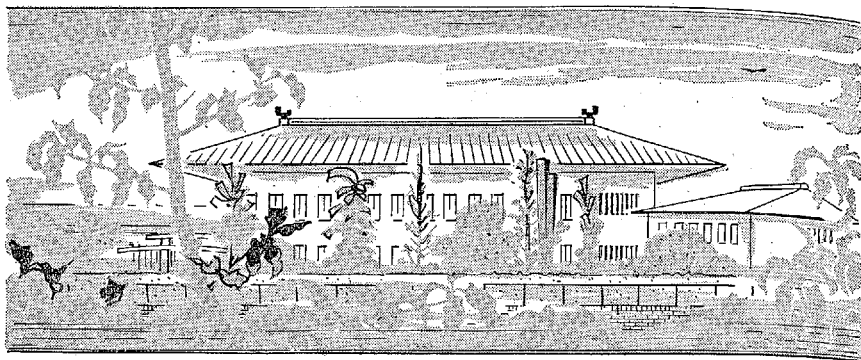


第七号



1973

京都大学人文科学研究所



人 文 第 七 号

1972年10月 ~ 1973年2月

も く じ

わたしの考え

サル作りとサル廻し作り

会田 雄次

講 演

開所記念公開講演

龍馬像の変遷

飛鳥井雅道

賭と確率

内井 惣七

辛亥革命と日本

小野川秀美

書 評

竹内成明『戦後思想への視角』(横山) 吉田光邦『立ちすくむ現代』(狭間) 吉田監修『京都』(樺山) 吉田『ペルシア裂』(桑山) Yoshida, IN SEARCH OF PERSIAN POTTERY (桑山) 梅埴忠夫・多田道太郎編『論集・日本文化』(荒井) 上田正昭・林屋辰三郎・奈良本辰也・陳舜臣『歴史と人間』(松原) 会田雄次・原田伴彦・杉山二郎『織田信長』(古屋) クワイン著、山下正男訳『論理学の哲学』(内井) 坂田吉雄・吉田光邦編『世界史のなかの明治維新』(藤校)

7

共同研究のうごき

『広弘明集』雑感(砺波) 宗教社会学的類型論としてのセクト(前川) SPSSのすすめ(三宅) 東洋学文献類目欧文部の再検討について(愛宕) 西洋近世理論思想史の研究(上山)

17

研究ノート

イタリア社会学界の動向

23

一再洗礼派セクトの理念と現実
漢魏六朝の語りもの

井上 忠司
中村賢二郎
小南 一郎

旅

アフガニスタン便り(田中重雄) 陶器づくりのひとたち(桑山正進) 子沢山のスイス山村(中村賢二郎) カルヴィザイノ村で思ったこと(井上忠司) ソーナ・トリリングエ(樺山紘) コルズジャから(前川和也) キアロスのトルコ人(松原正毅) ベンガルにできた国にて(横山俊夫)

26

書いたもの一覧(一九七二年一月〜一九七三年二月)
お客さま(6)・おくりもの(39)・人のうごき(38)

40

4 2

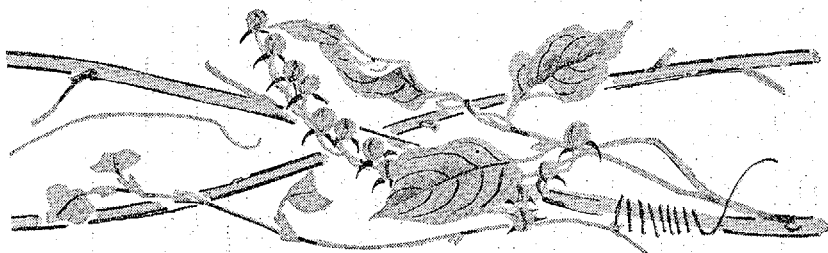
サル作りとサル廻し作り

会 田 雄 次

ある新聞で地方の雑誌やP R誌の記事紹介をすこしやったことがあった。そのせいかこのごろ送られて来る印刷物がやたらと多い。新聞、雑誌、P R誌など定期発行物を試みに調べて見たら一カ月に約七百種類千五百ほどになっていた。封を切るだけでもちょっとした仕事で、もちろん殆んど読めない。目を通すのは週刊誌ぐらいのもので、おかげで「変な」情報には通じなかった。

ところでP R誌をふくめ、いわゆる評論めいたものを書いている人である。その数はすくなく、固定している。つまり大部分がなじみの人だ。一人の人が似たようなことを各誌に何度も書いていくことになる。私のところへ送られて来るのは実際発行されているものの一部にすぎないらしいから、多い人は何十、ことによったら何百も書いていると想像されるぐらいである。

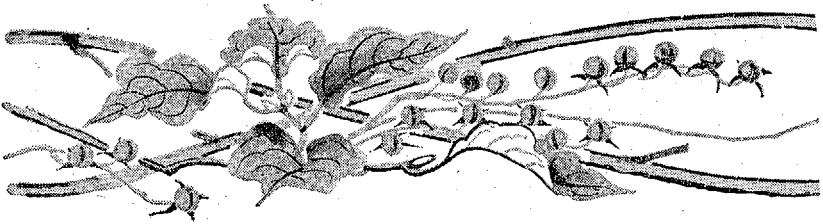
として見ると情報化時代とはいいいながら意見オピニオンに関しては少数



専門家の型にはまった意見が大変数多い各種のメディアによって重複しつつバラまかれているということになりはしないか。

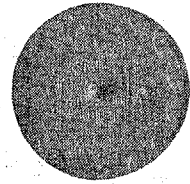
これは編集者側の勉強不足ということもあるが、私はどうも編集者側の人数がやたらと増えた反面、書く方の人が一向増えないということが一番大きい原因と思われる。京都にも東京の出版社の人が絶えずやって来ていて、私なども、こういう対象について、こういう企画の線に沿って書いて下さる方はいないかとよく聞かれる。見聞がせまいせいか仲々思い当たらない。紹介しても執筆を断られたり、編集者側の望みに合わなかったりすることが多い。

どうも戦後の教育は、「サル廻し」の養成には適合し、うまくも行ったが、サルの方を作るということは不適合だったようだ。そして今日のような猿不足が生れた。そのおかげで私のように鐘叩きの芸しかないものまでそれ踊れ、笛も吹け、太鼓もたたけ、輪くぐりは、などとせめられるということになっていくのではないか。この傾向は何もマスコミに乗るとか乗らないということではなく、小説家で新人が一向現われぬことに示されているように、人文社会関係で本物の学者ザルの数が減って来ているという現象にも通じるといえよう。研究は立派であっても、書いて、他人が読んで学界の共通財産にならなければ学問とはいえない。読むにたえ、理解し得る表現能力を持つ人が減って来ているのだといえれば極言に過ぎるだろうか。



講演

開所記念講演



昭和四十七年二月六日
於分館ホール

龍馬像の変遷

飛鳥井雅道

坂本龍馬は、維新をはじめてふりかえるきっかけをつくった自由民権運動以来、もっとも人気のある志士であった。薩長にたいする反撥からも、龍馬はしばしば民主主義の源流として描かれてきた。明治十年代の坂崎紫瀾『天下無双入傑・海南第一伝奇・汗血千里駒』がそのはしりとすれば、明治四十年代に二十数年のつみかさねで刊行された『維新土佐勤王史』の大著は、郷土・龍馬の姿を浮きぼりにするものだった。明

治期の民権論者たる龍馬像は、大正デモクラシーの申し子ともいふべき「明治文化研究会」の幕末研究のなかで、『船中八策』、『藩論』の発掘・再評価となつて、大政奉還による無血革命とその後の議会制民主主義をさきどりした思想家・龍馬の像が定着されていったのである。

第二次大戦後の龍馬像は、この文脈のなかで拡大されていった。司馬遼太郎『龍馬がゆく』全五巻は、維新史を、薩長同盟からの倒幕運動を、龍馬・後藤象次郎の大政奉還コースに集約することで、血をながさずに維新回天の業をなした天才として描出し、龍馬像をさらに戦後民主主義の価値体系にフィットさせることで、大量の読者を獲得する。

しかし、龍馬は、それほど徹底した平和主義者であつただろうか。たしかに中岡慎太郎を土佐における武力倒幕論の代表者とすれば、それに対比して坂本龍馬を大政奉還派とする分類は、『維新土佐勤王史』にも原型がある。しかし、こうしたもののわかりのよさに反する史料は、史籍協会編の各種の文書のなかからも多く見出すことができるのである。一例をあげよう。

「建白之儀万一行はれされは固より必死の御覚悟故……海援隊一手を以て大樹参内の道路に待受社稷の爲め不戴天の讐を報し軍の成否に論なく先生に地下に御

面会仕候」

大政奉還の当日、後藤にあてた強迫状めいた手紙の一節である。龍馬はこのときまでにひそかにライフル千三百丁を購入し、海援隊を武装させ、土佐の兵の入洛をも要求していたのである。彼は素手で待っていたのではない。そこからわたしの疑問ははじまる。彼はこの直後暗殺されてしまい、戊辰の内乱にはたちあえなかったが、実のところ、残されたあらゆる史料は、平和主義者・龍馬の像をくどく方向をさしめしているのではなからうか、と。維新の変革は、大政奉還ではおわらなかつた。内乱が必要だった。この見地から史料を読みかえすことで、わたしは、もう一つの龍馬像を構成できると、考えている。

賭と確率

内井 惣七

この講演では主観主義確率論（ベイズ流統計学ともいわれる）を紹介した。

「確率とは何か」という問いに答えるのに粗くいっ

て二つの学派がある。ひとつは頻度説である。これは、同じような試行をくり返し行なう（例えばサイコロを投げる）ときに生ずる事象の頻度が長い間には一定の割合に収束するという統計的現象に着目し、確率を長い間の相対頻度であるとみる立場である。もうひとつは主観説である。これは、賭に典型的にみられるような不確定な状況下での行為決定に際して確率が果たす実践的な役割に注目し、確率を各々の主体の信念の度合であるとみる立場である。命題Aに対する主体の信念の度合は、ある理想化された条件のもとでAに対する賭を考え、このとき彼が公平であるとみなす賭率によって測定できるとされる。

この講演では、まず頻度説の立場の欠点をいくつか指摘し、主観説が生ずる背景を説明した。つぎに「公平な賭率」、「部分的信念のシステム」、その「整合性」などの主観説の中心的概念を説明し、最後に主観説の立場で確率の法則（公理）がどのように正当化されるかを示した。

以上は主観説の基礎のほんの一部分である。主観説の重要な成果およびそれが伝統的な帰納法の問題にいかなるかわりをもつかは、拙稿「賭・確率・帰納法」（『人文学報』第三七号に掲載予定）でくわしく論じてある。

辛亥革命と日本

小野川 秀美

武昌蜂起から南京臨時政府時代において、北一輝などのいわゆる「大陸浪人」の動きと日本政府の中国侵略政策との関連を詳細に革命の過程の中に位置づけ、辛亥革命における日本の位置を明らかにした。

(文責・編集委員)

お客さま

ティロ博士

(DDR科学アカデミー古代史考古学中央研究所員)

本誌第四号「国外との交流」という題の文で外国の友人をよぶことの難しさを嘆じた。その中の一人ベル

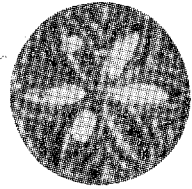
リンのティロ博士 Dr. Thomas Thilo が、長い間の工作の結果、昨四七年十一月から本年一月にかけて、まる二か月間、京都へ来ることができた。手続上の招待者は龍谷大学であったが、同氏は京都滞在の過半を本研究所で過ごした。その間、十二月十七日に本所で「唐玄宗即位の祥瑞」と題する研究発表を行なった。

玄宗が山西の潞州に居た間に、かれの即位を予報する十二の瑞徴が相次いで現われたことを「旧唐書」は記録するが、子細に調べると、それらは、かれの即位後に旧居を訪れた機会などに製造せられたものであることを証した。それかあらぬか、『新唐書』はそれら祥瑞について何も語らない、

という趣旨で、その研究は近くベルリンの研究所の学報に発表される。

ドイツ民主共和国に正式に滞在した日本の学者は極めて少なく、先方から来た学者はさらに少ない。東洋学の範囲でいうと、此方側から向うへ行ったのは、われわれの研究班員四人だけであり、先方から来たのはティロ氏が初めてである。同氏の来訪によって、今までは此方からの一方交通だったのが、相互交流の形にまで進めることのできたことを喜びたい。

書 評



竹内成明『戦後思想への視角——主体と言語——』

(B6判 二四九頁、筑摩書房)

「私にとって、すべてのものを取り出しうるという合理主義（唯物論を含めて）の信念がおそろしいのである。」——戦後日本の思想界を風靡した「マルクス主義」と「近代主義」にいちはやく抵抗した竹内好は、「合理主義の背後にある非合理的な意志の圧力」を「ヨーロッパ的なもの」であると見た。そして、専ら「権威」として導入されたこれらの主義が「みすて」た、庶民の日常生活の「暗い片隅」を思想の拠点とすべきであると考えた。

竹内成明さんは、この主張を基本的には認めつつ、「ヨーロッパ的なもの」とは「非合理的な意志の一つのあらわれにすぎ」ず、

その「圧力」はおそよ普遍妥当を主張する「ロゴスの体系」としての世界観の特性であるとし、その「陥穽」の構造を、「主体」「認識」「言語」の相互関係から説明される。

竹内さんの書の骨子の一つであり、また魅力でもあるのは、たえず「自己批判」に支えられた「反権力、反幻想」の思想であるといえる。「自分のコトバのなかに体制と権威を見出し、それを拒否しうるみずからの価値を立てないかぎり、抵抗と解放のコトバもやがては体制と権威のコトバに転化してゆく。」

やがて竹内さんは、「価値体系を中国

（魯迅と毛沢東）にあずけ」た竹内好と別れ、また、おのれ自身の持つ大衆像を批判する契機に乏しい吉本や小田をも批判し、「世界を支配し、人民を指導する思想ではなしに、ひとつひとつの民族のなかではぐくまれる思いが生命を失わないような思想」を求められる。その試みの一環として、「近代ヨーロッパ語の言語習慣」のもつ、「すべてを対象化」してしまふ主語述語の関係や時制の構造を一つの特殊と看做し、「実存」や「世界大の理性」「進歩」等の観念がうまれてくるしくみを、他民族の言語との比較を通じて分析され、他方、「日本語の言語習慣」の構造の中に、相対的なものとしかなりようのない「主客未分」の世界認識の可能性をみられる。一層の展開が期待される論点である。

こうした作業をふまえて、現代の日常生活の場でのさまざまな抑圧に抵抗しようとする「情念」を殺すことなく、おのおのにとっての「真実」を「格闘させる」ことになから、一つの普遍を求めてゆくような思想のありかたについて説いておられる。

この評論集は、『粛清』ということがあらためてクローズアップされた昨年四月に

出た。ほどなく、私はむりを言って一冊を頂いた。読んでみて、はたととまどった。私が二年余り前、使いはしたが、その意味をみずから満たすことがたえてできなかったゆえに、今は意識して避けている、ある種のコトバの群れをみとめたからである。此度、編集委員の方から書評をたのまれて、二度読んだ。一度は、七〇年前後の、書かれた当時の状況を思い浮かべ、その当時、「運動」の場に依存することでのみいきいきと語られていたそれら諸々のコトバの「熱」を蘇らせながら、二度目は、すべてに、できるかぎり「問主観的」な概念規定

吉田光邦『立ちすくむ現代』——人間と技術は回生するか——

(B6判、二八二頁、ダイヤモンド社)

『立ちすくむ現代』——なんと象徴的な表題ではないか。公害・インフレ等々を数え

えたるまでもなく、ほんの小さな事柄でさえも、少し深く考えれば、現代社会の行きづまりを誰しも感じているにちがいない。この窒息寸前の危機的状況を、著者は「巨大性の谷間と等質な時空のなかに立ちすく

をつけてみて。

いずれの読みかたも、適切ではなかったようである。竹内さんは、この集を出すにあたり、「少しでも読みやすいものにしよう」と手をくわえられたとか。惜しい気もする。「あとがき」は、珠玉の一篇である。その一節にこんな文章があった。

「本書を通じていいたかったのは、ものを書きくことのこわさである。そのこわさを、自分の文章が身をもって証言しているのではないかと、いまおそれている。」

(横山俊夫)

む現代」と捉えて、「人間と技術は回生するか」との問いを発するので。

本書には、著者が六九年から七一年にかけて著した文章のうち、「おもに現代文明、またその骨格をつくる科学・技術について考えたもの」五十余篇が収められている。それらは、いろんな角度から著者の問題関

心を一貫した統一性を保ちながら縦横に論じたもので、とりあげられている素材は、かの七十年万国博をはじめ、アポロあり、大学闘争あり、社会万般のことにおよんでいる。つまり人びとの関心ある事柄を組上にのせることによって、科学・技術を論じ、知識・情報を語り、さらには前衛芸術まで評して、われわれの口にあうよう料理するというわけなのだ。

料理するさいの著者の基本的なシニーマはこうだ。現代の社会すなわち「巨大社会」においては、国家・民族・企業の三つが主要な構成要素をなし、「その対極にはかばそく孤独な人間が立ちすくむ」。いまや、機械が機械を管理する巨大な体系が出来あがっており、人間を裏切った機械が、人間を食いつくそうとしている、というのだ。

誰もが日常的に慣れ親しんだ素材をもとに、博覧強記をもって鳴る著者がきわめて平明な叙述で論をすすめるのであるから、科学技術にうとい私なども惹きつけられつつ、なるほどと腑におちることも多い。その意味では専門的知識を一般読者の咀嚼にたえるように加工する技術の好見本である

と思う。

ただ惹きつけられつつ読みながらも疑問に感ずるのは、機械が機械を管理する巨大社会をあやつっている人間が無視されているという点だ。だから、いろいろな事象をわが身の経験にひきつけて理解し納得することはできながらも、ではどうすればいいのかといういらだちを、なんととはなく混沌の気分として懷かされることになってしまふ。そう、私ならずとも普通の読者なら、どうすれば立ちすくむことなくまともに歩めるのかを聞きたいと思うにちがいない。

吉田光邦監修『京都——古都の一年——』

(LPレコード三枚、解説書三頁、トリオ電気株式会社)

これは、二時間あまりの、京都の音の集成である。東福寺、妙心寺の梵鐘から、詩仙堂の猪おどし。祇園会はコンチキチンの鉦の音、今宮のやすらい祭、葵祭。そして報恩講、大般若、童唄、酒造り唄のなま身の声。箏、三弦、尺八といった楽器の音色。それに市電の音というご愛嬌、空也堂開山忌の迫力も的確にうつしとられている。録

しかし、著者は「呪術の復讐」というきわめて魅惑的な提言をしているとはいへ、たとえば、「機械と人間のせめぎあう場になるう」としている「家庭を論じて」、「家庭での人間と機械の共存関係を考えること」の重要さを提起するにとどまるのだ。けれど、著者は、みずからは機械に圧倒されぬ自由な人間性を堅持しながら、高みに悠々然と寝ころんで「立ちすくむ現代」を俯瞰しておられるのであろうか。

(狭間直樹)

は、なにやら物足りないのだ。技術的困難はともあれ、どうも音というものに宿る不思議な影を、いっつこうにかまえていないかららしい。

音というのは、ごく偶然的で一回的なものだ。説明づくではない。これとくらべれば、音楽というのは、時と場とを限定して聴く者を当然に予想する、一種のつくりごとである。抽象化された音の構成体である。それのもともとの素材である具体的に現実的な音、このアルバムが集めようとしているのは、京都の音楽ではなく、京都の音である。

音もよく、解説もおもしろい。
二、三年前のこと、明暗寺の尺八献奏会をきいたとき、わたしはふと音のコレクションを思いついた。昨年の暮、カセットコーダーをしのばせて、スペインのモンセラート修道院の名高いクリスマスミサを収録したところで、三十本をかぞえることになった。とはいへ、気ままに続けたこの蒐集

音は具体的だから、ほんとうは現場にいわせなければならぬ。知恩院、妙心寺の梵鐘はもとも印象ぶかく再生されているが、じつはそのメタフィジックは、頬を切る寒風のなかに立ちつくしていなければわかるまい。記録される音に臨場感と現実性をもたせるために、祇園会の雑踏にマイクをおくのもわるくない。奏楽や都おどりを、ステージではなく、稽古場でねらうというの、いささか見えすいたやり方に見えるが、舞台の抽象性を免れるための努力としては、買ってもよい。

しかし、だからといって、かりに全身で興奮するような異常な臨場性でのみささえられる音、たとえば鞍馬竹伐りの青竹の裂ける音や、嵯峨釈迦堂のお松明の火花の音は、いかにハイ・フィデリティで収録しても、再生はされないだろう。「京都の音」は、素材として音楽になる以前の生の音の具体性、一回性を最高度に追求したいという欲求と、他方では録音というメディアがもつ現実からの距離、つまりは再生される音の非現実性、とのあいだのやるせない緊張のなかでできあがっている。

無数にある日常の現実の音のなかから、うつろうてとらえがたい瞬間のメタフィジックを発見する仕事は、容易であろうはずはない。物音ひとつないホールで、ピアノソナタを聴くよりは、おそらくずっと強靱

吉田光邦編『ペルシア裂』

「ペルシア裂の逸品を英国ビクトリア・アンド・アルバート博物館の所蔵品を中心に広く各方面から集め、精巧なる原色版に

な精神を要することであろう。

しばらく前に、小沢昭一の『日本の太道芸』（ビクター）が評判をとったことがある。これは芸の面白さもあれ、ステージではなく、日常空間のもろもろの音の交錯のあいだに作りだされる、特異な人事の音の世界が、苦心のすえ再生されていたからである。同じく評価の高い『四季の野鳥』（NHK）も、鳥かごではなく、早朝の里と敷のなかでうつしとられた鳴声のなかに、自然のメタフィジックが宿っているかにみえたからである。いずれの場合も同じことだ。珍しいものだけ採録すればいいというものではないのだ。現代の才人光邦氏には、『日本の音』という、いよいよ難かしい仕事に期待されるゆえんである。

（樺山紘一）

（A2裂型、二〇巻、有芳堂）

複製し、「毎月一回一〇葉宛刊行。全一〇集一〇〇葉を以て完結」したと奥附にある。「刊行規定」なる項が奥附に記されている

のはあまりほかにみない。あまりみないのはこの版の大きさもまたしかり。さらに見開きの表題にあたる頁が第一集にしかついていないのもまたしかり。こういう図録には図版目次があるものだが、これにはなく、資料も各方面から広く集められたようだが、出所の記載はない。編者の解説は毎集つくのかと思ったら、第一、第五、第八、第一〇に数頁ずつ付く。題して「ペルシアの染織——技法と文様」。第一集だけしかつかないのかと思ったら、第五集に「続」があった。これで終りかと思ったら、第八集に「(3)」、第一〇集に「(4)」が出てきた。どうも図版は図版、解説は解説、の感を深くせざるをえない。解説はつけたしの挿入みたいだ。

それはともかく、解説の内容はそれだけの意義をもたせてある。前半が主として技法、後半が文様に当てられている。空間、時間のひろがりの中に「ペルシア染織の技法と文様」の位置づけがなされる。広汎な筆者の知識が四回に及ぶ西アジア現地調査とあいまって、実際にペルシア裂をみるような展開をみせる。この図版に載せられたペルシア裂が現代のものでないにせよ、解

説の隨所に織りこまれた現代の工芸技術に關するアプローチがもしなかったならば、解説の意味は減退していたらう。ただ、原色版と直接かかわりをもつ解説は第一〇集に至ってはじめてあらわれる。だからどのような読者（鑑賞者？）を対象にしているかわからないけれども、これを手にするひとたちは、刊行の最終段階まで原色版をただただながめ入るしか手はない。

若干の校正ミスのほかに、「ペルセポリスにみられる諸国からの調査図……」（一

Mitsukuni Yoshida, IN SEARCH OF PERSIAN POTTERY

(Transl. by John M. Shields, Weatherhu)

こんどはなんとも同じ著者の書物二冊を書評せよという。しかもこの一冊は英題がついている。『人文』第六号をみると出版社も横文字だ。これはえらいことになった。一方で英題のついた和書であれかしと思う同書室に借りにゆく途中、ひょっとしたら原書は日本語で、これはその英訳じゃないのか、ありうるありうる、と思う。そうだ

四頁二六〇二七行目）というくどりは、私のとんだ考えがちでなかったとしたら、文脈からみて、「『朝、貢、図……』のあやまり。速筆できこえる著者の筆の走りすぎか。また「サファビッド朝」とか「サファビー朝」とかいう同義二様の使い方もその類とおもわれる。『人文』第六号の「書いたもの一覽」にこれと同一の書物が「有終堂」刊行になっていて、「有秀堂」の肩を曇らせている。妄言多謝。

（桑山正進）

としたら原書は、『ペルシアのやきもの』に相異なし。

予測は事実にかわった。淡交新社から一九六六年に出たものの英訳。訳者は John M. Shields。カラー図版 No. 5 に、もとは表紙のさし絵だった八稜星形人物対向釉壇があらためてはいり、グラビア No. 86 と No. 87 と 91 との入れかわりがあるほかに、写真の変

更なく、あいかわらず暗い調子のグラビア。裏表紙に地図、本文の前にペルシア王朝表が加わって、読者に便宜を与える。内容は全然かわっていない。直訳である。原著者の日本語は英語に直しやすそう。日本語版では、「先史の土器」、「イスラム期から現代まで」、「ペルシアと中国」の順に書かれた。こちらは Prehistoric Earthenware, Islamic Influence, Journey to Hormuz となつて、原著より内容を把みやすいし、しやれている。

このように、原書があつてしかも七年前に出版されたものだから新刊書評むきとはいえない。『ペルシア裂』の解説と同趣の内容、ペルシア陶器を年代をおって概観したもののだが、単なる机上の操作によるペルシア陶器史でないことは、『ペルシア裂』解説と同じだ。こちらはとくに一九六四年のイ・ア・パ調査人類班としての成果を取り入れ、陶器を中心とした旅行談になっているところがちょっとちがう。

原書には「あとがき」がついている。「日本のペルシアのやきもの」の研究はぜひぶん進んでいる、という人もいられるけれど、わたしにはとてもそうは思えない。」海外

の關係雜誌をみるとに「その感を深くする」という著書が、「そうした世界に対する、ささやかなガイドブックにすぎぬ」原書を世に問われた。これが「あとがき」にみえる。英訳ではこのあとがきが Preface

に当るところだが、見当らない。原書出版以来七年の間に日本におけるペルシア陶器の検討が長足の進歩をとげて、これを訳し出す必要がなくなったのであろうか。

(桑山正進)

梅棹忠夫・多田道太郎編『論集・日本文化』

(新書版、三冊、講談社)

わたしなどには、ほとんどがなるほどなるほどとなすかされることばかりで、もし書評せすともよいのなら一層楽しく読めたはずですが、とにかく面白くて為になる本だと思いました。

この論集は、もともと雑誌 Energy の通巻三〇号の記事から三七篇を抜萃し、①「日本文化の構造」②「日本文化と世界」③「日本文化の表情」の、三巻にまとめたもので、もとより統一見解のごときは打ちだされておらず、まったく百家斉放、百家争鳴です。たとえば①巻の「日本の民衆は『島国根性』をもたない」(和歌森太郎)と、②巻の「港の文化史的意味」(会田雄次)とでは、日本民衆の進取の気象ないし

は冒險精神について正反対の論証が展開されており、文化現象では(真実とはいわず)事実でさえもがなかなかつかまえない実情が如実に示されています。

さらには一つの論点に止まらず、日本(文化)そのもののとらえ方も、樂觀的か、より危機感が強いかは各篇大いに差がありますが、歴史学者・人類学者・経済学者による①巻の座談会「都市と文明」、対するに主として詩人による③巻の座談会「七五調の周辺」、この両者のはいなど、特に顕著な対照をなしているようです。ただし論じられたのが全然別個のテーマなので、やはり簡単には比較衡量できませんが、それにしても前者における樂觀主義は、戦後

わずか二十数年にして、まったく異様な段階にまで達している……。

増田(四郎)「赤道に近い地域には、近代的な文明は将来とも起こらないように思うな。メガロポリスも起こりそうにない。この地域の人々には働く意欲が低いんだものね。」泉(靖一)「資源の開発なんかの問題ではない。人間がだめなんですよ。」坂本(二郎)「しかしあの地域でも、いま義務教育が普及しはじめていますから、あと十五年もすればかなりいい労働人口が期待できるのではないですか。」

かの李卓吾の真価は、才に非ず学に非ずその識にこそあると評されたそうですが、このような文化人の発言を見ると実際、識の重要さを改めて認識せざるをえません。まさに赤道に近く、メガロポリスはおろか文明とは無縁の「化外の民」に、敗残の皇軍兵士として接したときの体験を奥峰謙三はこう書きました。

私は、酋長らしい土人の男に向って、「アメリカ・ソルジャー・カム・ガン」といって、(中略)アメリカ兵に来てもらい、銃で殺してもらってくれ、といっ

たつもりでした。(中略)すると親切な土人の男は、首を左右に振って、「アメリカ・イギリス・オランダ・インドネシア・ニッポン・サマ・サマ」といいました。(中略)私はその後、「サマ、サマ」とはインドネシア語で「同じ」ということを聞きました。(『ヤマザキ、天皇を撃て』第一部)

まあしかし、この部分以外はとても批評のかぎりではありませんが、中国に関する叙

上田正昭・林屋辰三郎・奈良本辰也・陳舜臣

『歴史と人間』

(B6判、三九頁、朝日新聞社)

本書は、『歴史と人間』というタイトルであるが、ただししくは、『日本史と日本人』ということであろう。内容は、上田正昭氏の「日本の原点」、林屋辰三郎氏の「変革の時代」、奈良本辰也氏の「抑圧から解放へ」、陳舜臣氏の「日本史との対面」の順序で、たいへんてぎわよく整理されている。一読、「日本史名人会」、「日本史名人競演集」といったおもむきである。

上田師匠の語り口は、あくまでも緻密で、

述には二三、やや穏当でない表現があるように見えます。③巻の「神道と季節」(上田正昭)の、詩歌の四季分類は『万葉集』がはじめだ、というのは大面白指摘と思いますが、それ以前の「中国の詩集にはない」と断じてよいかどうか。少くとも『文館詞林』は四季分類だった可能性があり、厳密には「詩集」といえぬにせよ『芸文類聚』歳時部は春夏秋冬に作品を分類排列してありますから。(荒井 健)

すみずみにまで、メリハリがきいている。ちょうど、起承転結がピチッと整った、江戸落語の人情噺のさわりを、きくかのようである。

林屋師匠は、きちんと古典話の筋をおいながら、さいごは、「日本未来談義」という破格のおちでしめくくっている。日本史家はなれをした日本史家、といった印象である。もっとも、歴史家の本質的な任務のひとつは、まさに「未来談義」の展開にあ

る、ともいえるのである。その意味では、林屋氏の破格さは、歴史家の正統性のうえにのっているわけである。また、この延長線をのせば、SF作家小松左京氏の種々の作品は、もっとも正統的な歴史学的著作である、ともいえよう。

奈良本師匠は、「人物談義」、「抑圧」、「解放」の三題噺を、漫談にのみこんでいる。

さいごの陳師匠は、中国人による日本人の理解と誤解という主題を、シロウト的態度をとりながら、展開している。

歴史学へのシロウトたちの参加は、歴史学の生命力の回復のためにも、たいへん重要な役割をもっているように、わたしにはおもえる。さきにあげた、小松左京氏の、宇宙史的規模から人間史的規模まで、伸縮自在な歴史観、おもしろさ抜群の司馬遼太郎氏の史談、講談、緻密な構成力をもつ古田史学(古田武彦著「邪馬台国はなかった」参照)などに対しては、いずれ、歴史学における、正当な評価が要求されてくるのではないか。そのさいには、歴史学における「正統」の意味が、直截的にとわれることになるだろう。または、これらの人々の仕事は、正統・異端論義のらち外のこと

るで、しぶとく生きのこつてゆくのかもしれないが。

座談とか講演の記録では、かたる人のなま身のおいが、いつかしれずあらわれてしまうものである。この種のもののおもしろさ、魅力は、まさにその点にある、といつてもよいであろう。「はなし」のばあい、矛盾、撞着が、あらわになりやすい、とも

会田雄次・原田伴彦・杉山二郎

『織田信長』（批評日本史『政治的人間の系譜』四巻）

（B6判、三二〇頁、思案社）

「信長になりたいという欲望は現代人みんな持っている。私だけじゃなしに（笑）」という会田さんの発言で座談会がはじまる。この座談会では、信長がよくて家康はだめ、秀吉はその中間という大体の評価では三人の出席者の意見が一致しているようであるが、この点をとくに強く主張しているのが会田さんである。

何故会田さんがそんなに信長をもちあげると云えば、一方で江戸時代を陰湿で不潔なエセ道徳の支配したどうしようもな

いえる。完成した論文や著作においては、これらの矛盾、撞着は、整理され、論理的斉合性の背後に、かくされてしまいがちである。

論理的斉合性のころもをまとめた、この著書『歴史と人間』から、チヨロチヨロともれてくるなま身のおいは、本書を読むたのしみを倍加している。（松原正毅）

い時代とみるからであり、その反面、信長のなかに「本能そのまま、人間性を不羈奔放に發揮できる世界」をみ、安土・桃山文化を日本のルネッサンス」と評価するからである。この会田的信長観が座談会を方向づけている。

ここでの信長論は、信長における物狂い」と「合理主義」——在来の枠にとらわれない奔放さが何故可能になったのかという点を中心にして展開されている。そして、つまるところ、信長をささえたのは農民的

エネルギーではなく、土地から離れたエネルギーであり、この土地からの自由が、信長の奔放さの基礎なのだということになる。それはしばしば「浮浪化した」というイメージで語られている。そしてこのようなエネルギーを自らの力のなかにくみ込んでゆくためには、尾張という中進地帯を基盤としてたことが極めて有利な条件になったとされる。

とにかく話題は豊富である。宣教師やイスラーム文化の影響が論じられるかと思えば、日本の船には甲板がないといった船の構造から城下町のつくり方、さらには主婦業の成立や、毒殺文化といった問題までとび出してくる。そのなかで、武だけで天下をとれるのは日本の特徴で、ヨーロッパだったら宗教と文化をつかまないとだめだ、という会田さんの指摘には興味を引かれた。読み終って、会田さんの強烈な農民嫌いが印象に残った。そして同時に、何故、信長から家康へと、会田さんの嫌いな方向に歴史が動いていったのかについてももう少し論じてもらったら、信長の問題ももっとはっきりしたのではなからうかとも思われた。

（古屋哲夫）

ウィラード・V・クワイン著、山下正男訳

『論理学の哲学』

(B6判、一七二頁、培風館)

“Contrariwise,” continued Tweedledee, “if it was so, it might be; and if it were so, it would be; but as it isn't, it ain't.” (Lewis Carroll, *Alice through the Looking-Glass*, ch. 4.)

クワインの「まえがき」は以上の引用から始まる。これがなぜクワインの主題に関係あるかは、トウィードルディーが以上のことばにすぐつづけて何を言ったかを補えば直ちに明らかとなる。すなわち “That's logic.” 実は、山下訳ではこの文が脱落している。ルイス・キャロルからの引用とクワインの出だしのパラグラフとの関連がわかりにくくなっている。

トウィードルディーが実例によっておこなった論理学の定義を、クワインは体系的、理論的におこなう。彼によれば論理学とは論理的真理の組織的研究である——ただし、ある文が論理的に真であるのはその文と文法的構造を同じくするすべての文が真であ

るときである。以上の定義をクワインはいろいろな面から肉付けし、その妥当性を論じていく。とくに第四章で展開される論理的真理の種々の定義（それらは互いに一致することが示される）、および第五章で展開される論理学と集合論の区別に関する議論はみごとにまとめたものである。そしてこれらの議論の結果、論理学と論理的文法の範囲内に収まるのは真理関数、一階の量化、そして同一性であることが明らかにされる（以上をまとめて外延論理と呼んでよからう）。さらに最後の第七章では、アプリオリな真理と経験的な真理との二分法に反対するクワイン一流の議論が展開されている。

さてクワインの本を読み終って再びトウィードルディーの実例に目をやるとき、つぎのことに気がつく。すなわちクワインの定義による論理学および文法の範囲内で扱えるのはトウィードルディーの最後の文だけである。なぜなら、最初の二つの文はク

ワインが論理学から追放しようとする様相語句 (“might,” “would”) を含み、したがって真理関数ではないからである。そこでこの結果に不満をおぼえる読者は（多分トウィードルディーもその一人であろう）、クワインとは異なる論理学の定義を提出したいと思うであろう。外延論理の美しさに対するクワインの賛辞にもかかわらず、それは結局トウィードルディーの単純な頭で考え得る文の三分の一しか扱えないほど非力なのである。

しかし、こう言ったからといって、わたしがこの本の価値を低くみていると結論してもらっては困る。クワインに賛成するにせよ反対するにせよ、この本はすべての論理学者が真剣に検討する価値のあるものである。

蛇足としてつけ加えれば、この本は内容が比較的平易に書かれており（記号等はいま出てこない）、邦訳もよくこなれて通りの良いものとなっているにもかかわらず、素人の方（人文の諸先生方）が教養のために読むのには程度が高すぎる。

（内井惣七）

坂田吉雄・吉田光邦編

『世界史のなかの明治維新——外国人の視角から』

(B5判、三六二+29頁、京都大学人文科学研究所)

同僚諸氏のおあつた研究報告が研究所から配給されると、「これは大変なものでできた。腰を入れてじっくり拝読しよう」と心には思いながら、その時間もエネルギーも足りなくて、いつの間にかその本は書架のどこかに埋没するのが常であるが、この本は配給をうけた日の内にいっきに何篇かを讀んだ。私にはたいへん面白かったのである。

明治維新の前後に日本に來た外交官、商人、船乗り、技師、宣教師、教育家、……あちこちの国のさまざまな立場の人たちの眼を通して、当時の日本の動きをとらえようという試みで、試み自体がなかなか卓抜である。そしてここに登場する人たちの若干は中国でも働いていたことがあり、私には無縁でなかったことが、私の興味のひとつの原因にもなっている。所収の報告は九篇、所外の人たちのものが多い。報告の作

り方は、未刊の記録を発見して丹念に調べたものから、ありふれた翻訳書の抜萃をよせ集めたものまで、精粗まちまちであるが、それはそれ、これはこれなりに、とにかく行ける。

読みながら第一に感じたことは、こんな面白い共同研究が分館で何年間もつづけられているのをちっとも知らないでいたことの迂闊である。私の同級生で朝日新聞社員の後藤孝夫が、「分館の研究会に出るために京都へ来た」と言って、ときどき坐りこんで行ったが、かれの來たのはこの班であつたことを「あとがき」で知った。かれから少し様子を聞いたなら、時には出席もできたものを、との悔恨の情を禁じ得ない日を繰ってみると、この研究班の油の乗って來た頃は、私が京都をるすにしていた時にあたる様で、これを知らなかったのは私ひとりかも知れない。しかし、ちかごろは

合同研究会もほとんど開かれず、分館とは疎遠になりがちである。この『人文』、とくに「共同研究のうごき」の欄は、そういう間隙を埋めるのが主な趣旨だが、そのほかにも何か共同研究の進行状況を知らせ合う機会が作れないものだろうか。と言って、本館の共同研究のいくつかにも出席しかねている現状では、それが知らされたからと言って、分館まで毎週出かけることはまず覺つかない。一つの研究班が一年か二年ごとに、拡大研究会を開いて成果を示すという方法など、如何なものであろうか。どうか好い知恵があつたらお聞かせ願いたい。

(藤枝 晃)

『広弘明集』雑感

— 隋唐の思想と社会 —

礪波 護

五年間を一応の目安としてはじまった隋唐班は、準備期間とした最初の二年間に、先人によるすぐれた注釈にめぐまれた『三論玄義』と『大乘起信論』を検討しおえた。これにより、仏教の論理や術語になじむことができただけで、所期の成果をおさめたとように思われる。かくて三年目にはいった去年の春から、道宣の編著にかかると『広弘明集』の厳密な会読が開始され、この一年間、その訳注に全力がそがれた。『広弘明集』といわれても、見当のつきかねる方も多いであろうから、メモ代りに簡単な解題をしておこう。

南山律宗の祖として知られる道宣（五九六—六六七）は、唐代随一の仏教史家でもあり、大蔵経目録である『大唐内典録』のほか、『梁高僧伝』を継いで、梁初から唐初までの高僧の事跡を記録した『統高僧伝』をも撰している。『広弘明集』は、梁の僧祐の『弘明集』をうけついで、仏教護法の書であり、中国中世において仏教（仏典）が如何にして漢字文化の中にくみこまれ、中国

民族の哲学的思考の中にとりいれられたかを考察する上で、屈指の史料としての価値をもつ。『弘明集』が、主として東晋から齊梁にわたる南朝の護法論文集で、内容の分類はされていなかったのに対し、本書は単に論説のみならず、詔勅・詩賦・文書におよぶまでの、あらゆる形態の資料およそ三百種を網羅し、しかもこれらを、端正・弁惑・仏徳といった十篇に分類し、年代的にも、仏教が中国にはじめて流伝して以来、南北朝をへて唐初にいたる全時代をおおっている。だから、あえて統弘明集といわず、広弘明集と題されたわけである。道宣は、十篇の各篇に篇の趣旨を序文としてかき、すでに『弘明集』に収録されたおよそ六十種の論説についても、これら十篇の趣旨にそって分類し、その目録を篇首にかかげている。（ただし、通行の明本の系統の書、たとえば黄檗版本や四部叢刊本、には脱している。）

会読の底本には、増上寺蔵の高麗版大蔵経本を用い、その素晴らしさに、しばしば快哉を叫んでいるが、それはさておき、ここでは黄檗版本について触れておこう。周知のごとく、江戸時代に開板された黄檗版大蔵経は、万暦版方冊大蔵経の覆刻である。ところで、黄檗版において、正編たる『弘明集』の方は白文のままなのに、『広弘明集』には、全巻にわたって訓点送り仮名が付されている。なぜこのようなことになったのか、私にとって不

「可思議としかいいようがない。

隋唐班には、かつての弘明集班からの遺産がかなりうけつがれ十分に生かされているが、同時に、明らかに新しい要素が加わっている。それは、信頼にたる文学語学の専門家の方々が積極的に参加されていることである。

さきにも触れたごとく、論説のみならず詔勅や詩賦を包含し、辞書や用例集にも全くみえない難解な語彙の頻出する本書のごとき会読には哲史文それぞれの専攻者たちによる緊密な協力が必須の条件となるが、それが満たされたからである。歴史畑で育った私のごとき、歴史事実に目をうばわれ、つい虚字のもつニュアンスを見失ないがちになるが、この研究会のたびごとに、それらの方々の発言から、大いに啓発されている。

宗教社会学の類型論

としての「セクト」

—異端運動の研究—

前川和也

ヴェーバーの宗教社会学をてがかりに異端運動論を考えてみようとした。かれは随所で「教会」にたいする「セクテ」を論じているからである。けれども、かれの

例の両分法がここでもひっかかりはじめた。その例は他にいくらかでもあげることができる。たとえば「予言者」と「祭司」、「達人宗教」と「大衆宗教」……。もちろんこれは、ひとつの「理念型」の対極に他の「理念型」を仮説的に設定して、それぞれが互いを照射しあうことでそれぞれをできうるかぎり鮮明化させるという、かれの類型論に根底から規定されている。

宗教社会学の分野ではW・スタークがヴェーバー（およびトレルチ）のこういった「教会」・「セクト」の両分法から脱却する道として、「宗教的エスタブリッシュメント」、「セクト」、「普遍教会」の三概念を軸にキリスト教世界を捉えようとした。つまりある宗教団体が内的には一社会層と合体するか、または外的には国家と合体すれば「エスタブリッシュメント」と、またこれらを完全に拒否すれば「セクト」となり、これから自由であれば「普遍教会」であるわけだ。もちろん教会が「エスタブリッシュメント」に近づくほど、「セクト」を産み落しやすくなる。

この「普遍教会」の典型が文字どおりカトリック教会やカルヴァン派であり、また「体制的教会」の代表例がギリシア正教会、英国教会である。

一見、常識論のように思われるスタークの理論からは、現代にいたるキリスト教総体内での「セクト」の観点か

ら前近代の異端運動を評価する道が開けるのであって、それなりにユニークだ。つまりかれによれば、カトリック世界には「セクト」の生れる余地は他と比べて少ないわけであり、また異端運動の評価にさいしても教会の対応のありかたがより重視されることになる。そして、カトリ派などは論外として、フミリアティの動き、ワルド派の運動の内にできうる限りカトリックの性格を読みとるという視点が生まれる。中世後期については、教会と勃興しつつあるナシヨナリズムの相克がとくに多くの異端を生み出したことが強調されることも当然だろう。この場合は異端運動の側がナシヨナリズムの担い手となる。そしてかれは、カトリック教会が「エスタブリッシュメント」化する徴候が現われたさいに、「セクト」ではなく修道院運動が復元力として作用すると考えている。つまり修道院「オーダー」が「普遍教会」から離れることによって設立されるのは、「セクト」が「エスタブリッシュメント」から分離することに現象的に類似はしているが、「オーダー」は「セクト」とは異なって最終的には教会に復帰することによって、教会を再生させ、革新してゆくというのである。その意味でスタークはフランススカン運動を「オーダー」の極限形態として、また対応者のイノセント三世を高く評価する。スタークを批判することはやさしい。壮大なシエーマ

だけに、まずあまりにも実証が弱すぎる。また「セクト」論一般から前近代の異端運動をみることになるから、運動のダイナミズム自体がほとんど把握されなくなってしまう。

あとひとつ。スタークはヴェーバー・トレルチよりは精緻になった。それだけにかえてわれわれは、宗教社会学における類型論の意義をスタークにたいして強く問うこともできるだろう。宗教社会学が人間の最深部と外界のありかたのダイナミズムを把握してみようという魅力ある分野のひとつだからこそ、われわれは類型論が腑分け作業に転化してしまわない方法を確認しておかなければならないのだ。そして最終的には、ヴェーバーの「理想型」的方法論にもこの問は向けられる。ここでそれは、たんに宗教社会学だけの問題ではなくなってくるはずなのだ。

SPSSのすすめ

— 社会科学における電算機の利用法 —

三宅 一郎

「社会科学における電子計算機の利用」研究会はこの

三月で終了した。この研究会はプログラミングなどコンピュータ利用技術の修得だけでなく、社会科学全般にわたるコンピュータ利用の実例、その基礎となっている論理モデルや教理モデル、さらにはコンピュータ社会論、文化論までとりあげ討議することを目標としたが、「浅くとも広く」をモットーとして討議課題を選んでいたもので、終了した時点では非常にたくさんの方の勉強をしたようにも思える一方、正直なところ何一つ身につかなかった感じもないではない。

少なくとも私自身にとって、この研究会のただ一つ確かな遺産は、SPSS（社会科学のための統計パッケージ）である。一般の社会、人文科学研究者の統計処理の技法はそれほどバリエアティに富んでいるわけではなく、しかも少数の技法を繰り返し使用することが多い。

だから、よく用いられる統計技法をできるだけ一般的な形でプログラミングしておけば、特殊な専門家を除く研究者の需要の八〇%ぐらいまでをまかなうことができる。こうしたことから、「統計パッケージ」というアイデアが生れ、実用化された。SPSSはなかでも内容的に高度でしかも使いやすいパッケージである。これによって、京大の人文・社会科学研究者はフォートランなどの計算機言語を覚えて自らプログラミングする必要が大幅に軽減されたことになる。私は二年半あまり前、

『人文』の第一号におけるこの欄で、「……われわれの研究班は、（このような）電子計算機と人文・社会科学研究者の間のギャップを少しでも埋めようと試みている」と書いたが、この目標だけはいくぶんなりとも到達できたと自負している。（残念ながらSPSSは複雑である上、大きすぎて、他の計算機へ簡単にもってゆくことはできない。）

このようなパッケージは本来研究者の集団によって育てられるものである。まだSPSSは輸入ものの点を抜けて切っていないが、京大で多くの人に使ってもらい、思わぬエラーを見つけていただいたり、改良の示唆をいただいたりして、われわれ研究者集団にぴったりしたパッケージに育てていきたいと希望している。

東洋学文献類目欧文部の再検討について

— 題目委員会 —

愛宕 元

現在、東洋学文献類目に採録している範囲はユダヤ、ヘブライ関係の聖書学やヘブライ言語学のもの、および、イスラム学のうち、北アフリカとスペインに関係す

るものを除いて、所謂、広義の東洋学全分野にわたっている。ごく大ざっぱな採録比率を地域的に見ると、中国及びその周辺地域（東南アジアを含む）に関するもの三割、インド関係が二・五割、ペルシャ、イスラム、トルコ関係が三割、その他、中央アジア、シベリア等に関するものが残り一・五割となっている。欧米で編集されている数種の東洋学関係の目録類は、各分野における専門家がそれぞれ見識をもってあつてゐるのは対し、我が類目委員会のメンバーはそのほとんどが中国学専門家であり、半分以上を占める西南アジア関係の諸論文に関して、サンスクリット、ペルシャ、アラビア等の特殊な諸々の語学的知識、およびそれらの分野の専門知識において、その能力的な限界は自ら存在する。東方部の構成員の協力のもとにある類目委員会を今後とも恒常的に続けていく以上、このようなハンディキャップも常にあると考へねばならない。したがって、東洋学文献類目を恒常的に編集していくことが前提としてある限り、最低限、東方部のスタッフが責任をもちうる範囲内の領域に採録する部分を限定することがぜひとも必要と考へられる。そのためには、現在の採録範囲を縮小して、中国及びその文化圏に限定するというのが望ましいと考へる。目録というものはより広範囲に、より内容的に緻密なものであるにこしたことはない。しかし、この両者を満足で

きる条件がそろわないとき、私の考へではやむをえず前者を捨てても、むしろ後者、すなわち、質的充実をはかることが必要であろうと考へる。目録編集をする者の立場だけでなく、利用者の側からしても、最も良心的なことになるのではなからうか。以上のような観点から、これまで数回にわたって類目委員会で採録範囲を限定する方向で討論を重ねてきたが、現在までのところ、必ずしも十分な賛意が得られない状況である。今後とも、検討を継続的に加えるつもりではあるが、大方の理解を期待したいものである。

〈新しい共同研究〉

西洋近世論理思想史の研究

上山 春 平

西洋部の共同研究班は、はじめ、一部一班的形でスタートして、ルソー研究、フランス百科全書派の研究、フランス革命の研究などのテーマにとりくんだのだが、近代ヨーロッパの思想と社会に焦点をしばったこの初期の体制から、やがて、中世ヨーロッパの社会に焦点をしばった共同体研究班が分岐し、さらに、社会人類学の観点

からする実態調査と理論研究をテーマとする班が分岐した。私たちの班のスタートは、さらに新たな分岐を意味するわけだが、大枠としては近代ヨーロッパの思想と社会に焦点をしばられた初期のテーマの特殊化といった形をとっており、ジャンルとしては論理思想史、時期としては十七、八世紀を研究対象としてとり上げることになんたいと考えている。

さし当り、むこう一年ばかりは、中世論理思想と近世論理思想との結節点に当ると思われるポール・ロワイヤルの論理学を手がかりとして問題点をさぐる準備期間を設け、この間は所内の内井・山下・上山がその作業に当たり、一応の準備のとおったところで、メンバーを拡大して、近世論理思想の系譜と問題点にかんする共同研究を進めたいと考えている。

準備作業に当たる所内のメンバーは、三人とも、それぞれの角度から西洋論理思想に関心をもっており、私のばあいは、カントのカテゴリー論にたいする関心から出發して、独自のカント研究者のパスの影響をうけながら、弁証法的論理思想のとらえなおしに関心をもってきたのだが、これは問題意識自体がきわめてオールド・フアッションでもあり、我流もいとこななので自分ひとりですべてやればいいようなものだが、山下さんは、プラトンやアリストテレスの論理思想の古典学的研究から出

発して、最近では中世論理思想史について研究を深めており、その上、最近の新しい論理学についても私などよりは遙かに造詣が深く、内井さんは、御存じのように最近アメリカに留学して、目下のところ世界の最高水準にあるといっても過言でないアメリカの論理学的研究の成果を充分に吸収して帰ってこられたところなので、この二人のメンバーが、それぞれ得意の観点から問題をとらえて推進力になってくれるならば、かなりの成果が期待できるのではないかと考えている。

予 告

去る三月二四日から約一か月にわたって、

河野所長ら八名よりなる学術友好代表団が人文科学研究所から中国に派遣された。ついては、「訪中代表団報告」を本誌の臨時増刊号として近々刊行すべく準備をすすめている。

(編集集員)

イタリア社会学界の動向

井上 忠 司

わたしは、現代における日本の社会・文化や社会心理に関する諸問題の研究を課題としている。近年とみに痛感していることは、他の文明社会との比較という視角の必要性であった。異なった文明圏にぞくしながらも、経済、社会的情況が日本のそれとかなり類似しているかにみえたイタリアに、わたしはつよい関心をもちはじめた。イタリアを鏡にしてそこにうつし出される日本の姿をとらえなおしてみたい、と思いはじめていたのである。折しも、昨年わたしは、「ヨーロッパ調査隊」の一員として、イタリアへおもむく機会をあたえられた。

イタリアの町や村において、フィールド・ワークを中心とした家族生活の実態調査を行なうこと、それが今回の調査隊におけるわたしの課題であった。あわせて、戦後におけるイタリアの社会学界、社会心理学界の現況を調べること、これはいわば、わたしじしんの副産物としての課題であった。ここでは、この副産物について、少しだけふれてみたいと思う。

第二次大戦前のイタリア社会学については、わが国では、新明正道氏と姫岡勤氏のすぐれた紹介がある。ほかに、加茂

儀一氏の訳述があるのみで、戦後のそれについては皆無にひしい。

イタリアの社会学は、ファシズムに貢献したという廉で、戦後、大学アカデミズムからことごとく追放された。二十年をへて、ようやくトレントの大学に社会学科が設置されたのを皮切りに、いくつかの大学アカデミズムのなかに、少しずつ復興をみたのであった。ミラノ大学のシンジオーネ氏によれば、このように長いあいだ社会学が冷遇されてきたのは、たんにファシズムだけの所為ではなかった。イタリアでは、クローチエの政治哲学の勢力がたいへんつよかったために、社会学の必要性はあまり認識されることがなかったのである。

「イタリア社会科学協会」(ローマ)の「社会学部門」、これがかつてのイタリア社会学の中心的な学会であった。ところが、大学紛争を境にして若手研究者の造反があいつぎ、七〇年には、その学会はついに事実上崩壊してしまった。若手研究者は新しく学会をつくったが、それも二つに分裂している有様である。いまやイタリア社会学界は、新しい危機に直面している。

わが国においても、戦前と戦時中にはひどい弾圧をうけてきた社会学が、いまや、少なくとも量の上では、社会学王国・アメリカにつぐ世界第二位の隆盛をしめすまじくなった。あたかも、わが国の高度経済成長の社会がそうであるように、そのなかにふかく埋没してしまうと、われわれはつよい問題意識をもちつづけることが、たいそうむづかしい。

いささか逆説めくが、日本の社会学は、イタリアの社会学

界の動向から、他山の石として学ぶべきところも多いのではあるまいか。このたび持ち帰ったいくつかの資料を通して、後日わたしは、そのことの一端を明らかにしてみたいと考えている。

一再洗礼派セクトの 理念と現実

中村賢二郎

一五二八年春、モラヴィアの再洗礼派の一群の人々は、領主の庇護する再洗礼派グループを批判したことから、ニコルスブルクの町を追われて流浪の旅に出るが、途中迫り来る窮乏に対処するため、各人の一切の持ち物を差出し、それを公平に分ち合うこととした。これが後にフッター派と呼ばれる共產主義的再洗礼派の起源であり、その時の情景はフッター派の人々自らが綴った年代記に感動的に描かれている。このとき二百人にすぎなかった彼らは、ドイツ、スイス各地から新たに流入する者を加えて、十七世紀初頭には一万数千人を数えるまでに発展する。

彼らが領主に庇護される再洗礼派グループに加えた批判は、その人々が剣の使用と領主の課す戦時税を肯定し、また相互扶助に対する熱意が不足していることに向けられていた。それだけにそれらの点で彼らは徹底しており、軍役と戦時税を拒否するのはもちろんのこと、財産共有制をとることもな

ったのである。そのようなフッター派に対しては、カトリックやプロテスタントが彼らを異端として排撃しようとも、キリスト教的理念に最も忠実な人々として賞讃する声に欠いてこなかった。しかし彼らの集団生活の内部に目を注ぐとき、そこには理念と矛盾する甚だ人間臭い事実や、また人間性の無視があったことに驚ろかされる。

たとえば物質生活における指導層と一般信徒との間の不平等がその一つである。一般信徒が貧しい衣食住に甘んじなければならなかったのに対して、指導層は暖衣飽食とまではいえぬにしても、一般信徒に比べて遙かによい衣食住を享受している。それは権威者が自己の欲望を満たそうとする自然な欲求の結果でもあるが、逆に物質上の差別によって権威の維持をはかるうとする考えにも基づいていたらしい。また青年男女は同席することのないように配慮され、結婚に際しては、指導層の選んだ三人の候補者の中から一人を選択する自由が許されたにすぎなかった。この結婚の自由の抑圧は、男女が夫婦生活に強い関心を懷き、集団への関心が薄らぐのを防止するためであった。セクトからの脱落者や他のセクトからの見学者はそのような様々の事実を報告している。

宗教における理念と現実との矛盾は一般的な事実であるが、柔軟性を欠いた反世俗主義の理念がそのまま制度化されるとき、その矛盾はいっそう目立ち、やがてはその宗教の生命を奪いかねない。フッター派が十七世紀以降増勢をやめ、セクトとして化石化していったのも当然の運命であったといえるようである。

漢魏六朝の語りもの

小南 一郎

一九五七年に、成都の天廻山崖墓から出土した鞞鼓說唱俑と呼ばれる陶俑がある。この後漢時代末の陶俑は、上半身はだかで、左手に太鼓をかかえ、右手ではちを持っており、たしかに語りもの師であるにちがいない。話しが佳境に入り、いかにも楽しみに全身で物語りをしている。

ところでこれまでの漢魏六朝時代の古小説史研究で扱われてきた小説的な諸作品の内容をふりかえて見るとき、この說唱俑の持ついかにも楽しげな雰囲気と合致するようなものはただ一つもないと言って過言ではない。この語りもの師は、いったい何を語っていたのであろう。

漢代の賦を読むとき、たてつづけに現れるむつかしい漢字の物名と形容語に圧倒されるが、しかしその枠組みをなす構造はきわめて単純である。二人あるいは三人の登場人物があって、一方がたてつづけに言葉を発射して相手を圧倒し、他方が「まいりました」と言って一篇が終る。現在の万才とそれほど構造的には異っていない。亡是公だとか烏有先生などというふざけた名前を名のった藝人者が登場する舞台があったのであろう。

そこでは言葉の意味ではなく、言葉それ自体が言わば物理

的に用いられ、述べたてる勢いによって相手を屈服させた。漢代の賦の鋪陳という特色ともその起源を一にする。更に遡れば、戦国策の弁舌によって立ちまわる遊説者たちにも共通する点がある。争い合う二つの国の間を言葉によって調停するが、それが両国の矛盾の根本的な解決であるかどうかは問われない。設定された困難な状況を口先でみごとにごまかし、両国から共に千金を得たことが称賛されるのである。道德にしばられぬ非士大夫的な笑いがかすかではあるがそこから感じとられよう。

民衆の笑いは楽天的であると同時に残酷である。その底ぬけの楽天性、反道德的な残酷さは、士大夫層の精神の容量をはるかに越え、それゆえ、文字に定着されることがほとんどない。

說唱俑が語っているのが、上述の万才的な藝人であつたかどうかはすぐには決定できない。ただ民衆的な笑いをもつた話藝であつたろうことは確かである。この陶俑の楽しげな表情一つを内容づけるためにも、今後長い迂回した探求の道のりが残されている。

旅



今回出土した金貨（AD二世紀）。上は表、下は裏（原寸大）。

アフガニスタン便り

田中重雄

神戸とカラチ港のストで出足を引つ張られましたものの、現場に着いてからは、番小舎に置いてあった発掘用品ではば予定通り仕事を進めることが出来ました。

遊牧民がテントを張るダシクトの駱駝、キャバープとノン、ア

フガニスタンの魅力は尽きませんが、何んと云っても未発掘のテベが、まだふんだんにあると云う事です。今年の外国考古発掘隊は米・ソ・仏・伊、それに英が常設の歴史考古の研究所をカーブルに開設するなどなかなか賑やかです。又インド隊はユネスコの費用でバミヤンの修理と保存工事を進めています。

京大隊の手がけている城岩と神殿の遺蹟、「タパ・スカンダル」は今度で二回目、中央丘の内城周壁と目千し練瓦を敷きつめた床全面を出しました。出土品としては状態の良い後二世紀の金貨（挿図）、その他シール、テラコッタ、土器に押捺されたスタンブ片数百などで、これらは吉本隊員の異常な熱意により厳重に記録されました。

樋口隊長が十月中旬に帰国したあと、私は考古局の倉庫に保管してある今迄の本隊発掘品の配分を求める目的で、そのチェックに当りました。恰度その頃『カーブル・タイムス』に日本人で美術史家でもある齋子さん（博物館長モタメディー氏夫人）が京大隊の従来成果に付いて写真入りの解説を載せられ我々は援護射撃をして貰っているように意を強くしましたが、局長の外国出張もあり、今年はリストを呈出するに止まりました。発掘品の持ち帰りは軍国主義的侵略に連がり、写真、測量図、記録さえあればいいではないかと云う考えがあるわけです。

カーブルの町は中級ホテルと遊民のアクセサリー等並べた土産物屋が無暗と増え、外国のヒッピーも一段と目に付きます。一にアメリカ、二にドイツ、三にフランス、四に日本だそうです、レストラン二五と云うのは入った時、客は全部ヒッピータイ

ル、そうでないのはこちらだけ、妙に場はずれな感じをいだいたことでした。

婦りに私だけペシャワールへ寄り、先年配分洩れの出土品の再配分を要請、隊長の申請を出してあったものの、あやしげな言葉をやつり大変神経をつかつて、百数十点のガンダーラ仏教彫刻片を貰い受ける事が出来ました。これはちよつとした儀式のようなもので、十数人の考古局の人に世話になりました。

バン格拉デッシュに独立されたパキスタンの表情は戦後の暗さは一見感じられなく、人々の顔は反ってさっぱりした——かのように見受けられました。カラチでは大きなビルの中に移転した日本領事館には文化センターも併設されました。活字に飢えた日本のヒッピーが、新聞を読みにやってくる来ますと、妙な臭いが漂い、これじゃ換気扇を増設しなければと思つた次第です。

陶器づくりのひとたち

桑山正進

一昨年から発掘を開始したカーブル北方のスカンダリア遺跡で、八月初旬から第二回目の発掘をはじめ、十一月上旬までに主要部の内城を出す計画でした。三ヶ月という長期にわたってまい日同じ顔ぶれでひとつ家に生活して女ッ気がないと、言わないでもよいことのひとつもいいたくなるので、そうなる仕事事の進行にも

さしつかえてくる。これを避ける意味で国内旅行を中間で行うことにしたわけです。

バーミヤーンは前回の大仏測量のし残しがあつたのでこの旅行に不可欠の場所。都合三日の滞在で目的は十分果たしたので、あとは自由行動とし、私はちよつとはずれたフォラディの石窟をみるため自動車を走らせたのです。ところがバーミヤーンの町を西に出たところに陶器を焼いている一団がいるのをみつけ、立ちどまらざるをえませんでした。ヒンドゥクシュを中にはさんだ南北の地とパキスタン寄りのアフガニスタン東部とは、現代の陶器の形態やその他もろもろに関してだいぶちがひがあります。山南はしかし山北と東部とのちよつと境目になっています。こうした中でヒンドゥクシュ山中ではどんな様子なのかそが長年の懸案だったわけです。バーミヤーンでカマ場にゆき当って少しばかり興奮したのはこういう由来からです。ここには山北とまったく同形のドーシュとよばれる円筒型のカマ、そしてひねり出すものも山北と同じ長頸に長大な片把手がついた水壺でしたから、これ自身にはさほどおどろくことはなかったのです。しかしいろいろ主人に聞いてゆくうちに実に興味深い事実におちつたのです。

自分たちはこの季節はバーミヤーンにきているが、北のマザリシャリフ、バルフにもゆくし、南はジュラバード（アフガニスタン東部の中心）にもゆくというわけです。これと同じ話は、ヒンドゥクシュ北のクンドゥズで先年私がおつれたことのある陶器づくりの一団が、カーブルの北に移動して、山北と同じ水壺をつくっていたのを一昨年みたことがあります。考えあわせると、ヒンドゥクシュをこえながら北と南あるいは東とゆききしながら

陶器をつくつてあるいているのです。それぞれ地域は限定され、ひとつの陶器づくりの移動するところに別の一団がはいるということがなく、はっきり縄張りがあることもわかりました。

バーミヤーンにいた陶器づくりにさらに聞くと、自分は使われている身だという。こういう集団がいくつもあって、その総元締が別にいるというのです。それならばアフガニスタン全体の陶器づくりの元締なのかというそうではない。自分らの元締はバルフからカーブルまでの線とその東を掌握しているという。バルフからヘラートまではまた別人、そしてガズニーから南や西にまた別の人がいてそれぞれを統轄しているらしいのです。

パキスタン寄りのアフガニスタン東部では古代においても現代においても、山北でみるような長頸長把手の水壺はつくっていない。この型式があるのは南はせいせいカーブルまで、このようにひとつ水壺をとりあげてもその形態に大きな差があるアフガニスタン東部とインドクシュを中心にした南北の地とを同じひとちが移動しているのです。もういちどバーミヤーンの陶器づくりにきいてみました。彼らは東部にいったときもやはり同様の水壺をつくるのかどうか。ジェラバードではバザールで山北にみるような水壺をついぞみたことがないからです。長頸の壺は我々の慣習だからつくらざるを得ないが、把手はつけないという答えがかえってきました。そんなたやすく把手だけつけないでいられるのかどうか納得がゆかないところもありましたが、そこは私のペルシア語の限界でもありました。

ジェラバードの西にバラバグという寒村があり、ここには

定着の陶器づくりがありました。バザールで生産地をききこんで出かけていったのはたしか一九六五年だったでしょう。ここではカマもパジャという地面を方形に浅く掘りくぼめたもので、窯壁もなく、野積の域をあまり出ないものだったのですし、壺も丸底で短頸の形でした。このあたりからパキスタン一帯に分布してゆく窯の形であり、壺の型式です。こういう地域に別系統の移住陶器づくりが定期的に行なうことがわかりました。またカーブルのすぐ北に移住してくる陶器づくりは円筒型のカマで長頸長把手の水壺を生産し供給しています。そのすぐそばには定住の陶器づくりの村があります。そこでは鉢とか皿とか碗とかのたぐいをつくり、水壺はつくっておりません。

私の知った限り、アフガニスタンには定住陶器生産グループと移住陶器生産グループがあるということ。この間の事情を発掘のあいまにただ聞き出すというのではなく、本腰を入れてたんねんに調べあげてみたいものです。そうしたら古代の土器づくりの実態を考えてゆくうえに、もっともっと参考すべき事実が出てきそうに思えてなりません。それに、一九六三、六四、六五、六七、七〇、七二年とアフガニスタンに出たりはいたりするたびに、この国が急速に欧米化の波にさらわれてゆくように思えます。そして、なにも陶器づくりにだけに限ったことでなく、在来の工芸技術全般にわたって、いまのうちにきちんと調べておかないと、とりかえしがつかなくなるでしょう。急に肌寒さをかんじて宿屋にむかったものです。

子沢山のスイス

中村賢二郎



私がチューリヒ大学のニーデラー教授から調査地にしてはと勧められて入村したのは中央スイスの山村リーメンスタルデン。チューリヒから車で一時間、下の幹線道路から僅か六軒ばかり山中に入ったにすぎぬ村であるが、私に同行して下さった同教授が

「世界の果てに来了。

だが貴方が希望したことでだから仕方がない」と私をおどした通り、

戸数二十戸、人口九十八人という全くの寒村。司祭もその年の四月以降後任者が決まらず、日曜口ごとに下の村々の司祭が交代でミサをあげに来るだけ。医者はずれともとおらず、小学校の先生（一人）すらもが夏休みのこととて郷里に帰って

いて、到着当初は無医村どころか、無インテリ村であった。シュヴィーツ県ではもちろん最小の村であるが、おそらくスイス全体でも最小の村の一つであろう。

その村で最初に気付いたのは、子供の数がむやみと多いこと。それだけは言葉の不自由な私にもすぐと知れる。間もなく聞き知ったところでは、宿の近くの民家四軒とも五、六人の子持ちで、他の民家もほぼ同様であった。夏休みの間は、小学校一年生程以上の子供はすべて乾草作りを手伝っており、しかも都市や平地農村の小学校は夏休みは一カ月であるのに、この村では、子供の畑仕事を考慮に入れて、半月程長いとのことだった。戦前の日本の子沢山農家のことを念頭に浮べつつ、多少品が悪くなると思いつつも、以後私は幾人かの人にその間の事情を聞いてみた。以下はその結果知りえた若干の事実である。

チューリヒ工科大学図書館員（私と同輩）の話。自分の伯母は農村に住んでいたが、十四人の子持ちだった。別段労働力が必要だからといって子供を多く生むわけではないが、多く生んでも労働力として役立つので、困るという意識がなかったのは確かだろう。面白いことに、その村の子供の誕生日はほとんど九月から十月に集中していた。

アールガウ県居住の学生の話。この村では農民はまるで牛のように毎年子供を生む。

グラウビュンデン県居住の女子学生の話。カトリック圏ではプロテスタント圏より子供が多いといえるでしょう。

リーメンスタルデンの宿のウェイトレスの話。この村の人のように多くは子供を産まないつもり。二人位がいいでしょう。

スイス山村の労働はきびしい。相当機械力が利用されているとはいっても、きつい傾斜地ではまだ人力に頼るほかない。その限りで子供はなお必要な労働力とみなされ続けるだろう。しかし私がスイスを去る直前、グラウビュンデン県では県民投票の結果、山村小学校の夏休み（ここでは半年程のことも珍らしくない）を都市、平地農村並みに近づけていくという法案が成立した。モーターゼーションの発達によって若い人の楽しみも増えている。そして彼らの意識も急速に変わりつつある。スイス山村民が子沢山による貧しさから解放されるのも、そう遠くはないことだろう。

カルヴィザーノ村で思ったこと

井上 忠 司

ミラノとベローナをむすぶ汽車の幹線のほぼ中間に、ブレッシアという近代的な都市がある。そこで汽車を降りかえて、クレモナよりの支線を南に少し入ったところに、カルヴィザーノという村があった。そのあたりといったいは、北部穀倉地帯のうちでも、酪農が中心である。

飯沼二郎先生と入れちがいに、わたしはそのカルヴィザーノ村を訪れた。昨年の九月下旬のことであった。村の人たちは、二度目の干し草づくりに余念がなかった。

村で二つしかない宿屋のひとつに、わたしは泊まった。「プロフェッソーレ・いいぬまの同僚（コレীগ）」というふれこみで、



レ ッ キ 教 授 の 邸 宅

飯沼先生と同じ宿をとった。一階の食堂は、夜になると、村の男たちでたいそうにぎわった。宿の主人が、わたしのことを「日本のプロフェッソーレ」だと、みんなに紹介してくれた。おかげで初日から、わたしは彼らにとりまかれ、矢つぎ早の質問せめにあわねばならなかった。

それまでの体験から、イタリア人から最初にうける質問にはかなり共通したパターンのあることを、わたしは知っていた。「あなた、どこからきたか?」「いつ日本をたったか?」「日本からイタリアまで、どのくらい(時間)かかるか?」「いつまでイタリア、またはこの地にいるのか?」「イタリアは好きか?」等々。ところが、思いがけない質問がひとつとびだした。「あなたは、日本に『お城』をもっているか?」というのである。びっくりしてしまつて、わたしはしばし返答に窮した。質問をした老人

の顔を思わずうかがったが、彼はだまじめであった。

村には、たいへん立派な「城」がひとつある。パドバ大学のレッキ教授が、その持ち主であった。同教授は、元貴族の末裔であり、この地方いたいに広大な農場を相続している。村の人たちに聞けば、同教授はほかの地にもっと大きな城を二つもっていて、この村の城では、夏のあいだのわずか三日間をすごすのみ、とのことであった。右の質問をした老人は、じつは、レッキ教授の農場の小作人のひとりなのであった。その老人にしてみれば、「大学教授」といえば、城をもっている身分の人であると思いいていたとしても、さほど不思議はなかったのである。

イタリアでは、金持ちの職業を三つあげよと聞かれたら、「医者」と弁護士と大学教授」と答えるのが普通のものである。教授の月給は、せいぜい日本の二倍くらいのものである。政学協同、産学協同が日常茶飯事のイタリアでは、教授はたいてい他の要職をかねているのである。たとえば、いまの政府の要人には、大学教授をかねているものが多い。前のコロンボ首相のごときは、現役の首相の身でありながら、週に一度はローマ大学で講義をつづけていたといわれる。学生運動の最も盛んなのは政治学部と工学部であるというのも、むべなるかなであろう。

政学協同、産学協同さらには軍学協同に、わたしは反対である。いまのようなイタリアの大学教授を、べつだんうらやましいとは思わない。さりとて、大学教授だからといって、清貧にあまじくいてよいなどとも、さうさうと思わない。「お城をもっているか?」、つぎには「別荘は?」と聞かれただけで、オタオタしてしまった自分を、ただなきけなく思っただけである。

その翌日は、レッキ教授の農場の管理人ソラ氏の一家を訪ねることになっていた。初対面の席でうけるであろうそんな質問には、けっしてもう驚かないぞと、わたしはひそかに思うのだった。

ソーナ・トリリングエ

樺山 紘 一

セルダーニア盆地にはいるひとは、さいごの峠をこしたときに、思いがけずひろがる、淡く白いもやのことを、わすれることができなくなるでしょう。南北二十キロ、東西十キロ、標高千二百メートルの高原。これはたぶん、ピレネーの山をつくった神さまが、ひと休みするために、しつらえた褥にちがいありません。セルダーニア盆地をあこぎに二分するように、国境がとおっています。こちらはスペイン、むこうはフランス、国境をつくりそこなったひとがいて、どうしたとか、フランス領セルダーニアの腹のなかに、スペイン領飛地ができてしまった。ずいぶんと不便だろうに、リヴィア飛地のひとびとは、まわりをフランス人にかこまれて、生きています。

リヴィア飛地ゴルグージャ村のロメウさんは、五十数人の村民のうちでは、インテリでした。日本が、シナの属領ではないということを、よく知っていたのだから。十月のはじめのある日、わたしは税関の車におくられて、この村にはいった。半月のあいだ、ロメウ家の二階で、ワラ布団を、いくひきかのノミとわけあって



ロメウ家に、けさ羊の子がうまれた

くらししました。

二千数百メートルの
ピレネーの峰々にかこ
まれて、セルダーニア
は、古くから世評たか
い名馬をうんできまし
た。いまではそれにか
わって、乳牛と羊とが
のどかに草をはんでい
ます。チーズ工場と小
麦倉もみうけられます。

ロメウさんの三百頭
の羊は、いつも朝七時
に小舎をでます。わた
しの寝ぐらのわきをと
り、教会のかどをまがって、むこうの小高い丘のふもとの草場
へでかける。わたしは、あの鈴音をきいてとびおき、あわててセ
ーターをうる前にきて、おいかけます。

ある夜半、ロメウさんがわたしの部屋をノックしました。

「コンチが子供をうむぞ、早くこなければならん。」

その夜、ロメウさんとわたしは、雌羊コンチが、苦しうに陣痛
にたえるのを、心配そうにのぞきながら、朝をまちました。純白
の雄羊がうまれました。難産だったのです。

「汝は、三百頭の羊をすべて識別することができるや。」

「できやしません。背中への焼印をみなけりや。だがなかで、

ひと一倍なつこいやつがいるものだ。このコンチが、わし
には、いとおしくて、いとおしくて。このかわい眼が、ほ
かのやつらとちがうぐらい、おまえさんにも、わかるだろ
う。」

ひと昔まえ、国境封鎖があつたころとくらべると、セルダーニ
アのいまは平和です。羊の群からはなれて、ゴルグーシアから、
雑木の林をぬけると、しらぬまに、わたしはフランスにはいつて
いる。民俗風の赤いボウシをかぶって、快晴のピレネーに、今朝
初雪がきたのを祝いながら、いきあう村々の人たちと、会話をた
のみしながら。

「今年の麦の作柄は如何であつたか。」

「初夏の低温がわざわざいしたね、それにしても今日は寒いね。
お若いのが、こんな山なかに何をしにきたのかね。」

「我は、セルダーニアの産業構造と、地域構造、ならびに民衆
の生活文化に関して、調査を実施しつつある。」

これだけをいうのに、三つのやりかたがあります。スペイン語で
やるか、フランス語か、そして、もともとのセルダーニア共通語、
カタラン語か。このおかしな国境の盆地、バルセロナの男が、そ
ういえば、いましめてくれたつけ。

「あそこは、ソーナ・トリリングエだぞ。」

三つの言葉の所、とでもいう意味です。

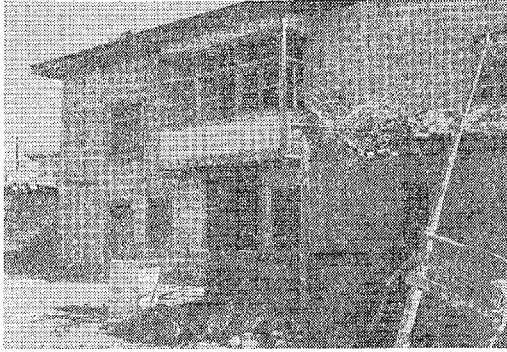
一月のはじめ、フランスのペルピニャンからバルセロナへのか
えり、鉄道でセルダーニアに寄ってみました。ゴルグーシア村の
北向きの丘には、雪がのこり、子供たちは、わたしをさそってス
キーに出かけました。秋にうまれた雄羊の子は、もうみちがえる

ほどのからだつきで、乾草をカサカサとたべている。ロメウさんの居間には、羊の皮でつくった肩かけ袋が、さがっていました。「これは、このまえのときにはなかったが。」
「かわいそうに、コンチが死んだんだ。産後の日だちが悪くてな。こうやってオレのそばにおいておきたいのだ。」

コルズジャから

前川 和也

わたしが九月中旬からやく二十日生活したトルコ西南部のコルズジャ村（人口は二千人をこえる。したがって正確には村ではなくて小さな町だ）は、けっして貧しくはないのだろう。地下水くみあげのおかげで、いまはなによりも水が豊かになった。そして砂糖大根が換金作物として重要な役割を果している。



私の下宿した家（村の広場に面した）

また、ひとびとの識字率も高いし（ふるくからの小学校と二年前にできた中学校がある）、県庁のあるブルドゥルまで車で約一時間という近さだから、この村は周囲から隔離された小宇宙でもちろんない。毎日早朝三台のバスがブルドゥルまで走っている。公共のものを含め電話は村で約十台。また二十家族以上はブルドゥルにもうひとつ家なしい土地をもっている。このあたりの農村はこのような形で都市とつながっていくのだ。わたしたちと同行した博物館助手は、当初すこしばかりがっかりして、「この村はあまりにもモデルンだ」と言っていた。モデルンとはもちろんフランス語からの借用。日本語のモダンとはほぼ同義に用いてかまわない。

たしかにこの村はここ十数年でモデルンな方向へむけて変ってきたのだらう。ただし、ゆっくりと。そしていまコルズジャは、変化の速度という点では、重要なそして微妙な地点にさしかかっているのだらう。また、ファーガソンのトラクターがはいり、フィリップスのトランジスターがはいってはいても、電気はまだこないというトルコの農村におくみられる現象は、ここでも変らない。

いっぽう、外部からの力によって急速に変っていった近くのあつる村のことを、その村出身の太学生から聞いたことがある。一年ほど前この地域一帯に大地震があり、その村の家屋は全壊した。そのため政府は有償ながらあたらしい家を建てて村民に提供し、またそれにもなつて、ブルドゥルまで車で三十分ばかりのこの村にははじめて電気がきた。けれども、新家屋のために家族形態はかなり変りつつあるようだし、地震がきっかけとなつてまえか

らさかんだった西ドイツへの出稼ぎもますます増えて、現在五千人前後の青壮年が人口約八百人のこの村からいなくなってしまうた。

コルズジャでわたしたちは村の広場に面した家に下宿することになった。家の当主は六十前後、そして妻は四十をすこしこえている。子供たちは五人姉妹だ。上の三人はすでに結婚し、十六になる末娘はブルドゥルに出て先生になるための学校に通っているから、十八になる四女だけが家で働いている。彼女はかしく、しっかりもので、しかも美人だ。妹のように上級学校にはゆけなかったから、せめて先生と結婚したいと考えて、十八歳になるまで結婚話をみな断わってきたという。彼女は、「村の男は女の心を理解しない」とまでいっていた。けれども村にはそんな適当な相手はいない。とうとう何年も前から彼女を恋している村の男と婚約させられることになりそうだ。

この家のとなりの茶店の息子（いま二十二歳だ）と結婚した三女はいま二十歳で、四つになる娘がいるから、彼女はすくなくとも十五のときには嫁いでいったのだろう。そしてブルドゥルの学校に通っている末娘は、もうこの村の男と結婚しない可能性がつよいだろう。姉さんたちがこれまでの村を、そして末娘が村にとつてのあたらしい世界を表わしているとすれば、四女はこれから変化していこうとしている現在の村を象徴的に示しているといえるかもしれない。そしてわたしたちとよく遊んだ四つになる三女の娘がおおきくなったとき、村はどのようになっているのだろうか。



ニコシアの街中のバリケード。バリケードのむこう側は、ギリシャ人居住区。

キプロスのトルコ人

松 原 正 毅

I

一九七二年十月九日の午後、トルコ航空のボーイング七二七機で、アンカラをたち、ニコシアへむかった。機は、一時間ばかりで、シリア国境ちかくのアダナにつく。ここまでは国内線であるが、アダナからは国際線になる。タウロス山脈ぞいに、シリフケちかくまで西へとび、そこから機首を南へむける。眼下には、トルコ語で、アク・デニス（白い海）とよばれる、地中海の深い青

色の海原が、ひろがっている。波ひとつみえない、おだやかな海だ。一時間後、ニコシアについた。

トルコ共和国の内陸部をしめるアナトリア高原には、冬のおとずれが近づいていた。それでも、日中のひざしはまだきつく、汗ばむほどであった。さすがに、夜ははださむく、セーターをきこまなければならなかったが。

しかし、キプロスから八日後に、ふたたび、アンカラにまいもどったときは、すでに本格的な冬だった。アンカラにかえた翌日には、街に初雪がふった。キプロスをたつ前日には、コルマキティ岬ちかくの寒村の海辺で、海水浴をたのしんでいたのだが……。

キプロス島は、面積約九千二百平方キロメートル、兵庫県よりすこしひろいくらいのおおきさである。現在、全人口約六十一万のうち、十八パーセント（ギリシヤ人は七八パーセント）にあたる約十一万人のトルコ人が、住んでいる。トルコ人は、十六世紀後半からはじまった、オスマン・トルコ軍のキプロス進政とともに、島にうつりすんできた。

オスマン・トルコ軍が進攻したとき、キプロスは、ヴェネチアの領有下にあった。島にすむギリシヤ人たちは、街のまわりに、堅固な城壁をきずき、オスマン・トルコ軍の侵入にそなえた。しかし、当時、無敵をはこったオスマン・トルコ軍は、地中海をおしわたり、なんなくキプロスを手中におさめた。オスマン・トルコ軍がはげしく攻めたてた城壁都市のなかに、現代のトルコ人たちは、おしこまれるようにして生活している。四百年前と、立場が逆転したわけである。

II

首都ニコシアの街の中心部には、十一のバスティオンを配した、直径約一・五キロメートルにおよぶ、円形の城壁がのこっている。ヴェネチアの領有下にあった時期に構築されたものである。

城壁のなかには、びっしりと家々がたちならび、商店街がつづいている。ひんやりとしたうら道をぬけてゆくと、とっせん、ベトンでかためたトーチカや、セメントをつめたドラムカンのバリケードがあらわれる。バリケードをさかいにして、商店の看板も通りの標示も、ギリシヤ語からトルコ語へ、トルコ語からギリシヤ語へ、ぱつとかわる。ギリシヤ人居住区とトルコ人居住区とが截然とわかれているのだ。ギリシヤ人居住区の壁のところどころに、「キプロスは、ギリシヤ人の国だ」という、青ペンキでかかれた落書きがあった。

ニコシアの城壁のなかには、うねうねと複雑にはしるバリケードの境界線でくざられている、まさに国境線である。バリケードのそばの監視所では、トルコ人やギリシヤ人の兵士たちのほかに、国連軍の兵士たちも、警備業務についている。このバリケードの線は、一九六〇年のキプロス独立にともなう、ギリシヤ人とトルコ人との、血で血をあらう「内戦」をへて、ふとぶとしくひかれた。

トルコ人居住区へはいつてゆく。足は、シシカバブのにおいにつられて、パサール（市場）のほうへと、自然にあゆんでゆく。途中にみる、小学校の校庭には、赤地に三日月と星のトルコ国旗が、紺碧の空にへんばんとひるがえっている。国旗のそばには、

ケマル・アタチュルクの胸像が、どっかりとすえられていた。これでは、まったくトルコ本国とおなじ風景ではないか。学校の授業も、トルコ語で、トルコ共和国の教科書をつかってすすめられているそうだ。

チャイ・ハネ（お茶屋）をみつめて、チャイを注文する。しかし、でてきたのは、胸がなかくびれになった、小さなガラス・コップにもられた、トルコ式のチャイではなかった。日本製の、白い磁器のコップにはいった、ミルクいりのチャイだった。

III

ニコシアから、北海岸のキレウスへいったときのことである。ニコシア郊外の、国連軍監視所のちかくにきたとき、乗っていたバスが、とつぜんとまった。バスの運転手は、なにも説明しない乗客も、進行方向をこわごわのぞいているだけで、なんの文句もいわない。国連軍のジープが、いそがしげにバスのそばをゆきかい、トランシーバーで、なにごとか連絡をとっている。

やがて一時間ばかりして、バスはうごきだした。うしろに三台、まえに一台、バスがつらなってはしっている。そのいちばんまえを、武装兵をのせた、国連軍のジープが先導し、最後尾にも、ジープが一台はりついている。しばらくゆくと、ジャーミー（回教寺院）のミナレがみえはじめた。トルコ国旗をかがけ、ケマル・アタチュルクの胸像を校庭においた小学校のまえをとおりました。トルコ人の村だった。

道の両側の並木がきえると、村はずれだった。国連軍のジープは、バスをのこして、そこからひきかえしていった。

あとできいた話によると、ちょうど二週間まえ、この村を通して中のギリシヤ人のバスに、手なげ弾がなげこまれ、数人の死傷者がでたそうである。手なげ弾をなげたのは、トルコ人の青年、ということであった。「内戦」は、いまでもつづいているのだ。

村をすぎると、やがて、標高千メートルぐらゐの山岳地帯にさしかかる。きゅうに緑がおおくなり、レモンやオリーブの果樹園が、斜面にびっしりとひろがっている。そこにも、トルコ人の集落が、点々とちらばっていた。そして、撮影禁止のたて札が、やたらに目についた。バスがのぼってきた方向をふりかえると、赤ちゃけた土地が、ゆるやかに起伏しながらつづいていた。

島内の主要な交通機関は、バスが乗り合いタクシーである。ギリシヤ人のバスに、ときには、トルコ人がのることもあるようだが、トルコ人のバスにギリシヤ人がのっているのは、ほとんどみかけなかった。トルコ人もギリシヤ人も、おたがいに、相手が存在していないかのようなたてまえのうえに、それぞれの生活体系をくみだてているようだ。

IV

南海岸のファマグスタでは、新市街から一キロメートルほど東にある城壁のなかで、トルコ人居住区になっている。城壁内にある、ゴチック様式の教会の鐘楼は、そのうえにブリキのとんがり帽子をかぶせられ、ジャーミーのミナレに姿をかえていた。教会時代のステンドグラスをとおしてさしこむ、赤や緑の光の下には、アッラーにいのりをさげるため、じゅうたんにひれふした老人たちの姿が、影のようにみえた。

ファマグスタの城壁の東南隅には、海の門につづいて、オセロの塔とよばれる建造物がある。そのうらが、港になっている。現在、港の地域は、国連軍の管理下にある。城壁のいちばんたかいところにあがって、港の風景をカメラにおさめていると、海水バノン一つの、若い国連軍の兵士が、双眼鏡でさかんにわたしを観察している。兵士の背後の風景といっしょに、かれのまっかに日焼けした姿も、フィルムのように焼きつけてやった。青い空と青い海を背にして、色あせた青い国連旗が、風にはためいていた。

キプロスの、トルコ人居住区とギリシャ人居住区との境界地域では、かならず、青地に地球をえがいた国連旗をみかけた。それ以上に目につくのは、紺青地に白十字、白い横線のギリシャ国旗であり、赤地に三月月と星のトルコ国旗であった。この二つの国旗には、島のあらゆる場所であくわした。

さて、かんじんのキプロス共和国の国旗は、どれなのか。キプロスをひきあげるまぎわになって、やっと気がついた。空港のまえに、ギリシャ国旗とならんでたっていた。白地に、オレンジ色でキプロスの島をえがき、島の下に、うす緑色のオリーブの葉を配した、あまり目をひきにくい旗が、キプロス国旗だった。さえないデザインの旗である。この旗には、島のなかで、あまりお目にかからなかった。

キプロス島は、たしかに存在している。ギリシャ人、トルコ人と自称する人たちが、たしかにキプロス島内で生活している。だが、キプロス共和国という国の実体は、いったい、なんであろうか。キプロス共和国という国は、いったいあるのだろうか。

ベンガルにできた国にて

横山俊夫

へ一九七二年二月某日◇ダッカの街角。湯気とタバコにけふる小さな大衆食堂。毎晩のようになされるムジブルヒーマンの演説を、ヤニのこびりついたラジオがブリビリと伝えている。カマル、自称「詩人」、「チエツ」、ヒズオンリシヤウティンク。「マニク、」やつらの腐敗はどうだ。「俺達はレポルーシヨンのために闘ったのだ。」長い口髭がモグモグ動く。「バシヤニ？ ムザファル？ 外国のパペットさ。」かつてのムクチバヒニの首領の一人動きを止めたニヒルな眼。その口から「ホプレス」という声が漏れるのを見る。「選挙？ どうせやつらの勝ちさ。」アラム、にこにこしながら店に入ってくる。一同沈黙。マニク、「ヘイ、ムジビズムとは何かね？」アラム、胸をはる。「簡単だ。一言で答えよう。」「社会主義と民主主義とハッピーマリッジである。」「一同ドツと笑う。アラム、「ムジブにかわりうる人物はだれもないぜ。」一同沈黙。

〈翌日〉ヨレヨレのシャツをまとった若い秘書に案内されて会ったA大臣。質素なセーター。「私は独立以来十分ねむったことがない。」「とにかく官僚がいらないのだ。」「裸足の少年がお茶を持ってくる。」「君、何をするにも資本がないんだよ。」「日本はどうして我々に援助をおしむのか？」

へ二月三一日」 バシヤニ派の集会。約十万人。某組合代表、

「ムジブは、すでに建國に失敗した。我々は起ちあがるのだ。」バシヤニ老、軽く手をあげて制す。メッカの方へ長い祈りをささげる。「もし此度の選挙が民主主義の原則にのっとて行なわれるなら、如何なる結果になるうと我々は反対しない。」「だが、もしそうでなかったら……すでに我々の闘う準備はできている……」その声、群衆の歓呼のどよめきにかきけされる。

へ一九七三年一月二日」 チッタゴン。早朝。霧。「リキシ」にのるなよ。」「汽車もだ。」「ゼネストだ。」「ダッカで学生八人やられたんだ。」

へ一月四日」 ダッカ大学。「トシオよく帰って来た。チッタゴンのストで三百人殺られたぜ。」「ほんとかつて？ 新聞は全部統制されてるからな。」深夜。学生ホール前。ムジブ派、乗りつけたジープの中から、「出て来て男らしく勝負しろ。」答える者なし。しばらくライフル、自動小銃の音続く。

へ一月五日」 「ムザファルのオフィスが焼かれたぞ。」警察の丸い楯のちぐはぐな列が中を隠している。その前に、先日の学生追悼の花束の散乱。群衆の間をぬって難民救済の国連ジープが走

人のうごき

昭和四七年一〇月一日～四八年二月末日

横山俊夫助手（日本部） 二月二〇日より二月一日までベ
ンガルおよびカシミール地方の民族主義に関する調査研究のため、インド・ビルマ・バングラデシュ・タイに出張。

りぬける。

へ一月六日」 いつもの大衆食堂。モニひとり。「やあ君か。ダッカの学生はだいたいお田舎に帰ったろっ。」「ムジブも長くはないさ。」やや声を低め、「選挙の前か後に大流血があるかもしれないぜ。」

へ一月七日」 ダッカ大学。「おい、M国の留学生、武装した連中にテープレコーダーとられたんだ。」「アィムソーリー、どうやらやつらのネキスターゲットはトシオらしい。」「不眠の一夜は、モスクから流れる美しいコーランの朗詠と共にしらみはじめる。昼間の喧噪の一切が虚偽に思える、何百年変わらぬ平和なひととき。

へ一月一日」 ベナレスにて。迷宮のような路地をぬけ、ようやくたどりついたガンガをながめる。小波がしきりに陽光にきらめく。同日のSタイムズ。「バングラデシュ発。アワミ連盟は声明を発す。ムジブを批判する者すべてを反国家活動者と看做す。」
へ三月九日」 日本。A新聞の小さな記事。「バングラデシュ初の総選挙でラーマン首相が率いる与党アワミ連盟が……国会議員三百議席のうち、九割以上を確保することが確実となった。」

二〇世紀七〇年代の前半。ベンガルにおける光景のいくつか。

*

京都大学第三次ヨーロッパ学術調査隊員は現地調査を終え、中
村賢二郎助教は一〇月一日、井上忠司助手は二月二三日、
前川和也助手は四八年一月一日、樺山絃一助手は一月一九日、松
原正毅助手は一月三〇日帰国した。

京都大学中央アジア学術調査隊員は現地調査を終え、桑山正進
助手は一月二五日、田中重雄助手は二月一二日帰国した。

おくりもの

流沙海西学会賞（桑山正進君）

第五回（昭和四十七年度）流沙海西学会賞（中央アジア部門）に桑山正進「大理石ヒンドゥー像はヒンドゥー王朝のものか」（『東方学報』四三冊、掲載）が選ばれた。昨年の前川和也君につづく本所員の受賞であって、同慶の至りである。

この論文は、京大中央アジア調査隊が発掘した大理石像について、東アフガニスタン出土の同種の像の一群を徹底的に検討し、さらに文献に徴證をもとめて、従来の通説を覆えして、これらがすべて七・八世紀間の製作であり、イラン文化の系統をひくものであることを結論した。その間の考古学的手法並びに文獻処理の手續きは周到かつ妥当であり、その所説は当然首肯すべきものをもつ。中央アジア史ないし考古学に一つの光を点するものである。

受賞式は十月十日に東京本郷学士会館で行なわれたが、本人がアフガニスタン調査旅行中であつたので、妹さんが代理で出席した。

（藤枝 晃）

O B 健在

薮内清名誉教授・ジョージ・サートン賞

薮内名誉教授が本年度のサートン賞を受賞された。

サートン賞は、科学史研究の先達である故ジョージ・サートンを記念して、国際科学史学会が設けたものであり、四年に一度、科学史研究の最高の業績にたいしてあたえられる。中国科学史の分野では、イギリスのジョーゼフ・ニーダムについて、薮内名誉教授が二人目である。

このたびの受賞は、薮内名誉教授の長年にわたる研究活動と秀れた業績にたいする当然の榮譽といつてよい。心から受賞を喜び、お祝いのことはを申し上げたい。

（山田慶児）

塚本名誉所員・勲二等

四十七年の秋の叙勲で塚本善隆名誉所員に勲二等瑞宝章が授けられた。二月一六日に京都プリンス・ホテルで祝賀会が催された。

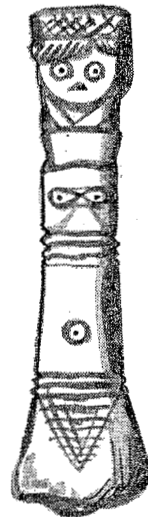
今西名誉所員・文化功労者

同じく秋の叙勲で今西錦司名誉所員が文化功労者となった。二月四日、京都ホテルで祝賀会が催された。

書いたもの一覧

一九七二年一〇月～一九七三年二月

(五十音順、◎印は単行本)



・会田雄次

◎夫の論理・妻の論理(角川文庫) 角川書店 一〇月

◎足利尊氏(『政治的人間の系譜』三卷)(共著・大隅和雄、山崎正和) 思索社 十一月

◎日本―その国益と世界―(編著) 日本経営出版社 十一月

◎極限状況の日本人 小学館 十一月

・飛鳥井雅道

自由・革命・独裁(『ドキュメント現代史』一卷・解説) 平凡社 一〇月

ロシア革命と「尼港事件」(『大正期の急進的自由主義』) 東洋経済新報社 十一月

平民社 現代の眼 二月号

書評『世界プロレタリア文学運動』 週刊読書人 二月二日号

・荒井健

中国詩学 京都新聞 十一月

巴黎茶花女遺事 同 十一月

瀛奎律髓 同 十一月

七つの杜詩注(『世界古典文学全集』三六卷A・月報) 同 十一月

古文辞類纂 筑摩書房 十二月

北平歳時志 京都新聞 十二月

首相の「漢詩」と主席の贈物 同 十二月

・飯沼二郎

体験的「市民運動」論 世界 九月号

日中国交「正常化」と日本軍国主義

ある高校生との対話 ベトナム通信 五七号 十一月

明るい北イタリヤの農民

朝日新聞 十一月二十七日

歴史のなかの日本人と朝鮮人(座談会・上田正昭、鶴見俊輔)

朝鮮人 八号 十一月

わたしにとつての朝鮮問題 思想の科学 二月号

農業問題——とくに『大阪朝日新聞』と対比して——

(井上・渡部編『大正期の急進的自由主義』)

東洋経済新報社 十二月

歩きつづけて八十五回 ベトナム通信 五八号 十二月

市民運動は「市民」の運動か 同 五九号 一月

「個と共同体」に生きる(対談・桑原武夫)

びーいん 一・二月合併号

朝日新聞 二月一日

日本農業の将来性 書評・アーベル著、寺尾誠訳『農業恐慌と景気循環』

社会経済史学 三八巻六号 二月

・今井 清

唐代史料稿大和三年(共編) 東方学報 四四冊 二月

・上山 春平

中央公論社 二〇月

◎大東亜戦争の遺産 岩波書店 一〇月

◎歴史と価値 図書 九一・一〇月号

哲学の課題 小学館 十二月

◎日本学事始(共著)

今日の思想的課題

朝日新聞 一月一日

無用の学の用

毎日新聞 一月六日

記紀と藤原時代

歴史と人物 一月号

記紀のアザイン

歴史と人物 二月号

・内井 惣七

Inductive Logic with Causal Modalities: A Probabilistic Approach. Philosophy of Science, Vol. 39 (1972), No. 2.

様相論理と条件法 人文学報 三五号 十一月

・梅 棹 忠夫

国際交流の新しい展開(座談会・ケネス・D・バトラ、ジョセフ・ピタウ、天城勲) 文部時報 一一四八号 一〇月

精密巨大な学識の縮刷版(書評・藤枝晃『文字の文化史』)

世界 一〇月

出口王仁三郎の人と芸術 木の花 一〇月号

「脱文化」文明は可能か(対談・小松左京)『地球を考えろ』 新潮社 一〇月

る・小松左京対談集』二巻) 岩波書店 一〇月

虫の眼と鳥の眼と(すいせん文)(岩波講座・現代都市政策) 新潮社 一〇月

日本を変えた一〇一人(第一部、古代から幕末まで)(座談

会・会田雄次、奈良本辰也、山崎正和) 文芸春秋 十一月

樋口敏二著『地球からの発想』(すいせん文) 新潮社 十二月

勝海舟の人間像(すいせん文)(講談社版『勝海舟全集』)

毎日新聞 二月

思想と土との摩擦(後藤総一郎編『人と思想・柳田国男』)

三一書房 二月

イメージの世界史(座談会・藤岡喜愛、大岡信、岡本太郎、

米山俊直) *Praxis* 九卷四号 二月

人類はどこまでいきつくか(座談会・小松左京、藤岡喜愛、

渡辺格) 文芸春秋 二月号

北海道の魅力を探る(対談・樋口敬二) 北海道新聞 一月

・小野 和子

下田歌子と服部宇之吉 朝日ジャーナル 一〇月六日号

・樺山 紘一

過疎の村スペインにみる 朝日新聞 二月三〇日

・川勝 義雄

孫呉政権の崩壊から江南貴族制へ 東方学報 四四冊 二月

・河野 健二

論壇時評 朝日新聞 一〇月三〇、三十一、十一月二九、三〇日、

二月二七、二八日、一月二九、三〇日、二月二六、二七日

新しい文明を求めて 読賣新聞 一月二六日

・熊倉 功夫

日記のなかの中世と近世(共著)

日本美術工芸 四〇九号、四一三号 一〇月、一月

民芸の発見 人文学報 三五号 一月

茶書つれづれ 淡交 一月、二月

近代的知識人と伝統芸能 芸能史研究 四〇号 一月

・小南 一郎

『西京雜記』の傳承者たち 日本中國學會報 二四集 一〇月

南朝の戀歌——「西洲曲」を中心として——

中國文學報 二三冊 一〇月

論衡 共同通信社系各紙 一〇月下旬

・副島 元照

『東洋經濟新報』の紙面構成とその変遷(『大正期の急進的

自由主義』) 東洋經濟新報社 二月

・多田 道太郎

野間宏『真空地帯』(解説) 新潮文庫 二月

都市空間のコミュニケーション(講座『現代都市政策』二卷)

岩波書店 一月

山本周五郎『天地靜大』(解説) 新潮文庫 一月

遊びと日本人 朝日ジャーナル 一月七日号～二月三日号
密室のなかのテレビ論 潮 三月号

・野村雅一

北イタリアの小さな町で考えたこと

イタリアナ(大阪日伊協会誌) 二月

・狭間直樹

中国共産党規約

共同通信系各紙 一〇月

王夫之『読通鑑論』

同 一〇月

安藤彦太郎編『現代中国事典』(長征等、数項目)

講談社 一月

・橋本敬造

梅文鼎の數學研究

東方学報 四四冊 二月

・林 巳奈夫

漢鏡の図柄二、三について

東方学報 四四冊 二月

・林屋辰三郎

まえがき・林屋友次郎著『日本古代国家論』

学生社 一〇月

近世をきりひらく三巨匠(永徳・等伯・友松展図録)

徳川美術館 一〇月

『狂言』というもの(『日本古典文学大系』月報)

小学館 一〇月

大学と文化財

以文 一〇月

都市と社会教育——『便用語』と会所——(岩波講座『現代都市政策』一巻・月報)

岩波書店 二月

京の視点

京 二二号 一月

書評・森末義彰著『中世芸能史論考』

史学雑誌 二月

◎『歴史と人間』(共著)

朝日新聞社 二月

歴史と公害(全国教育研究所連盟『公害と教育研究』)

京都府教育研究所 二月

京都と加賀

古都 二月

歴史のなかの父親

信濃毎日 一月一日

歴史のなかの公衆

京都新聞 一月六日

古代史の中の北陸(座談会・金達寿、谷川健一)一～四

中日新聞 一月

ふるさとへの年賀状

朝日新聞石川版 一月八日

茶と音楽——古き日中文化交流に思う——

サンケイ新聞 一月四日

六波羅の今昔(京都六波羅密寺展図録)

小田急 一月

『宇治市史』一巻序説・序章

人類愛善新聞 二月一日

愛と美といのち(対談・出口栄二)

人文 六号 二月

大学観光のすすめ

京都新聞 一〇～二月

京都の歳事史(コミユニティ)一〇～一四

京都新聞 一〇～二月

・樋口 謹一

思想の言葉

思想 二月号

・日比野 丈夫

華僑社会における信仰生活

東南アジア

天理教東南アジア研究室

十一月

陳嘉庚の生涯

同

中国三千年

歴史を彩る英傑一〇〇人(共同執筆)

別冊新評

十二月

◎中国書道史『隋・唐前期』(書道芸術別巻、三巻)

中央公論社

一月

科挙制度の功罪

図書教材研究 二号

一月

世界の旅に寄せる(皆川泰蔵『桑・世界の旅』三集、序文)

京都書院

二月

・福永 光司

『莊子』のなかの動物たち(宮地傳三郎『動物記』

二巻・月報)

一月

・古屋 哲夫

『ファシズム前夜の政治論』(『大正期の急進的自由主義』)

東洋経済新報社

十二月

・前川 和也

ソークルド・ジェイコブセン「メソポタミアにおける初期
の政治発展」(古代学協会編『西洋古代史論集』一巻)

(翻訳)

東京大学出版会 二月

・三宅 一郎

SPSS (社会科学のための統計パッケージ) 概説(1)

京都大学大型計算機センター広報 五巻一〇号

一〇月

SPSS (社会科学のための統計パッケージ) 概説(2)

同 五巻一一号

十一月

SPSS (社会科学のための統計パッケージ) 概説(3)

同 五巻一二号

十二月

社会的意思決定の経済学(再録)(東洋経済編『経済学
との対話』)

十二月

SPSS (社会科学のための統計パッケージ) 概説(4)

京都大学大型計算機センター広報 六巻二号

二月

・山下 正男

法律学と論理学

法哲学年報(一九七一年度)

一〇月

・山本 有造

植民地下朝鮮、台湾の域外収支(朝鮮篇)

人文学報 三五号

十一月

日本の植民地投資

社会経済史学 三八巻五号 一月

ホームズ船長の冒険——開国前後の長崎、横浜、箱館——

書評・『写真集四日市』 陶磁にみる中国と日本（鼎談・八木一夫、佐藤雅彦）

（坂田・吉田編『世界史のなかの明治維新』）

京大人文科学研究所 二月

私のいけばな論

淡交 一、二月

・吉田 光邦

中国の鉄

鉄 一〇〇二月

私の感度

小説サンデー毎日 一〇月

化学工業の夜明け（『日本人の二〇〇年』）

歴史に生きる京の産業

日本美術工芸 一、二月

◎中国科学技術史論集

日本放送出版協会 一〇月

◎世界史のなかの明治維新（共編）

対談（細川護貞ほか）

道具と美術教育

造形ニュース 一〇月

日本人と情報化時代（七十二情報化国際シンポジウム会議録）

職人

アルファ百科 二月

空間を染める（本野更一個展）

鉄 一〇〇二月

◎堺市史、続編、三巻（編著）

堺市 一二月

発見と創造

日本美術工芸 一〇、二月

◎大正期の急進的自由主義（共編・井上清）

同和問題を考える

◎京都（レコード監修と解説）

トリオ 二月

同和問題を考える

KG Today（関字通信）

名古屋文化試論（『尾張の茶道』所収）

技術と人間 二月

部落解放運動史の研究視角

創刊号 一二月

伝統技術のこころ

PH P 二月

山宣ひとり孤壘を守る（『日本人の二〇〇年』二二巻）

一月

百人一首からテレビへ

YTVリポート 二月

部落解放研究

創刊号 一二月

生産管理社会における文化の位相

建築と社会 二月

技術教育と技術者教育

林業技術 二月

日本人と自然

オール関西 二月

断ちきられる伝統文化

オール関西 二月

流動 一二月